

一、煙洲先生の講話口述

および外部記事よりの抜萃編

鈴木達治述

## 自由教育の片鱗

横浜高等工業学校発行

### 自序

横浜高等工業学校は、創設以来特殊の校是を定めて教育方針としてゐる。自由教育即ち夫れである。

自由教育は賛すべくして、甚だ行ひ難いところである。私は其難きを知り、不敏を顧ず自由教育主義を奉じて正に十有四年を閲せんとしてゐる。靡げながら外輪の鮮明し来つたことを自ら悟り得たのである。

所信よりすれば、自由教育は、論ずべきものではない。行ふべきものである。説くべきものではなく、示すべきものであると考へる。私は今日まで絶へず、自ら足らざるを懼れつゝある。従つて之を世に揚言し、吹聴する元氣は更でない。

本校の行ふところに就て屢々文書を求めらるゝに当つても敢て公にするを好まざる所以であつた。

然し乍ら校内に於ては、事に当り、時に応じて意見を發表しつゝある。特に一年生並に三年生に對しては、毎週自ら講話をなすを慣例とし來つた。一つは本校主義の存するところの手引とし、一つは其仕上げをなし、以て実社会に処せしめんが為めである。

この外毎年卒業式日に當りて、時事の所感を開陳し、校外にも所信の一斑を發表する所があった。本小冊子に於ては主としてこの卒業式日に開陳せる式辞を蒐めて上梓するに至つた。但第二回卒業式の式辞は、來賓講演者俄に変更の爲め草稿を作るの暇なくして記録を欠き、収録するを得なかつた。

本小冊子によつて本校教育趣旨の片鱗を読者に伝へ、聊か参考の資ともならんか幸甚に堪ざる次第である。

昭和八年四月

天 羊 生

### 自由教育の外輪

本校は、神奈川県と横浜市とが、大正五年に七十五万円と其敷地とを政府に寄附して設立することになり、同六年度より敷地の埋立整理に着手し同七年度より建築に取掛り、同八年度を以て

落成の筈でありましたが、時局の爲め物価が異常に騰貴した其影響を受けまして、未だ全く落成には至りませんが略ぼ授業には差支なき迄に運びましたので、茲に予定の通り、本日より授業を開始することに致しました。

開校につき、入学生徒募集を致しました処が、定員百二十名に対し、六百五十六名の応募者がありました。今斯の如き難関を通過し来れる諸君と、一堂の下に相見ゆることを得るのは、実に諸君の爲めに慶賀に堪へぬことで、私は満腔の喜悦を感じる次第であります。然しながら同時に、他の多くの失落者の爲めには同情を禁ずる能はざるものがあります。中学又は工業の卒業生は、何れも我が校に入学し得る資格を具備して居るのであります。募集人員を超過する爲めに、余儀なく選抜試験をするのであります。今回不幸にして選抜にもれた人々の中にも学力に於て、又品性に於て、優秀な人があつたであらうと思はれるのであります。随つて諸君は、入学の幸を得たと云つて決して自分等のみ優秀な青年であると云ふ自負高慢の心を起してはならぬ。自負高慢の心は今日折角贏ち得たる諸君の月桂冠を汚損し、やがては諸君を墮落失意の境に導くものであることを思はゞ却つて益々謙讓の心を起して、学に努めねばならぬと思ひます。

楮て私が、今茲に、諸君を迎へたといふことは、恰も吾家の子弟を迎ふるが如き感がするのであります。どうか、健康で、無事で業を卒へるやうにと只管祈願して息まないであります。特に諸君は、当校開始第一回の入学者である。三年後には第一回の卒業生として校門を出るのであ

るから、恰も我が家の長子の如き感がするのであります。されば諸君に於ても、私に對する恰もその父兄に對する如き、親愛の情を以てせられん事を希望するのであります。長子たるものは、将来其一家の責任を負ふ義務を有するが如く、我が校の将来に於て善良なる校風を起し、國家に貢献することに就ては、諸君は私共創業に關係するものと共に大に其責務を有すべきであります。其業績如何は、将来続々校門を出づる卒業生の上に重大なる影響を及ぼすことを覚悟しなければならぬ。そこで今日始業に當つて我が校は果して如何なる目的を以て又如何なる方針に由つて、学生の教養に力めんとするかといふことを詳しく説明して置く必要があると信じます。

斯種学校の目的は、実業学校令及専門学校令に拠り『工業ニ従事スヘキ者ニ高等ノ學術技芸ヲ教授スルヲ以テ目的トス』と規定せられてあります。本校は、勿論此の規定に基いて教育を施します、けれども、又一つの学校として、出来るならば何等かの特色を有したいと思ふのであります。何を以て本校は其特色としたいかと云ふと、私は茲に二つの事項を挙げたいのであります。

第一、技術上の知識の外に、一般社会及び經濟に関する知識の修得に就いて、特に注意を払ひたいと思つて居るのであります。今日の日本は大なる工業國となりつゝあります。而して資本と労働とは、工業に於ける二大要素であります。されば此の二大要素に関する十分な知識と理解とを有することは、殊に必要であらうと思ひます。

是れが又抑も工業界に立つ人々の、人格の大切なる要素を形成するものと信するのであります。

す。国家の歴史や、哲学の上に基礎を置きたる社会及び経済の知識は特に実業界に立つ人々に、円満なる徳性の、涵養に資せしむるものと信ずるのであります。尚ほ、是等に関する私の所見は、諸君在校の間随時吐露して、諸君の参考にして供したいと思つて居ります。

第二、当横浜は我が国に於ける古き貿易港として、長崎と共に最も早く且つ広く世界に其名を知られた所であります。それが為め、昔は一小漁村に過ぎなかつたのであるが、今日に於ては我が国六大都市の一になつて居るのであります。されば其地理上の便宜より、海外に於ける工業に關し、当然特別の關係を存すべきでありますから本校は特に此点に留意致したいと考へて居るのであります。そこで将来は海外の工業に関する特別講座の如きものを設け、此の方面に志ある學生の爲めに、特に其素養と知識とを授けたいと思つて居ります。私自身は従来此方面に、多少の注意を致して来たのでありますから是等の事項に關しては随時、その所見を發表したいと思つて居ります。

上記の特色ある我校教育の目的を達する方針としては、成るべく自由にして且つ啓発的教育を施したいと云ふ考であります即ち諸君を最も自由なる境遇に置き、其の天賦の才能を阻害せず、恰も春光慈雨に浴する花木の如く、其天稟の才能を培養發育せしめたいと考へて居ります。決して日蔭で成長せしめたくない、陰雨に腐朽せしむることなき様にと考へて居るのであります。而して茲に特に注意致したきことは、自由と云ふ意義であります。即ち自由とは決して放縱

と云ふ意味でないのであります。自由は容易に氣儘になる傾向があり、又屢々自由と氣儘とは混同せらるゝ場合がある様に思はれます。此區別を判然と心得て居らねば大なる過失を生じ、教育の目的修養の効果がなくなりませす。否、なくなるのみならず、或は反対の結果を生ずることなきやを恐れるのであります。氣儘は人を墮落に導き、自由は、人を向上に就かしむる道であります。二者は全然反対のものであります。されば、自由教育と云つても、學課に欠席するも出席するも、それは勝手次第と云ふのではない。理由なくして欠席するのは氣儘である。是れ既に一步墮落に墜ちたと同様である。或は規定されたる校則を全然顧みないのも、亦同じく氣儘である。決して自由と混同すべからざるものである。吾輩の所謂自由教育とは人間天賦の才能に適應した教育を施したいと云ふのであります。諸君は既に法、文等の学科を選ばずして、工科を撰択せられたることは、諸君の天賦の才能が、法、文等よりも工科に適應して居るものと考へてよからうと思ひます。然しながら諸君は中学の業を五ヶ年修業されたる今日に於ても、自分は果して工業に其天賦の才能を有するや、又工業にしても如何なる工業の分科に其才能あるやを的確に自覚することは、困難であらうと思ひます。又是れより当校に三ヶ年学んでも、尚ほ且つ的確に自覚することは出来ないかも知れない。そこで本校は其間に於て諸君の此等に関する自覚が、なるべく的確に出来る様に教育を進行させたいと思つて居ります。勿論本校の主たる目的は、身体健全思想堅実知識豊富なる技術者を社会に出して、製造工業の現場に従事せしむるにあります。

然しながら我が校は自由教育を尊重する為め、決して此の目的方向に諸君を強制するの意志はないのであります。三年の修業期間に於て、自分は工場の現業に不適當である、それよりも研究室に引籠りて創意的研鑽に従事したい、或は其二者何れも自分には適應しない、自分は工業製品の販売取引に従事したいとの考を起す人があるかも知れません。或は更に其範圍外に出で、工業上の著作又は著述に志し、或は工業教育に従事したいと云ふ人があるかも知れません。当校は諸君を強制して千遍一律に教育する考がない、そこで今より三年間の修業中に於て、諸君が自分は果して工業の如何なる方面に其才能が適應して居るかと云ふことを発見し、的確にその自覚を有たれんことを希望します。これが又自由教育の自然の結果であらうと考へます。第一年に於て学ぶべきものは、工業に必須の基礎学科であつて誰にでも必要な学科である。第二年以上になれば各種の題目は漸次分岐して来るから、其際は成るべく範圍を広くして撰択修業の便を与へんことを考へて居るのであります。

上述の如き方針を執るに於ては、其試験制度に於て、又其他の施設に於て、従来世間に執り来れる方法と異なる点は、自然に生ずる事と思ひます。併し是等は随時適當なる時機に其意見を發表して、諸君の覚悟を促すことゝ致します。

諸君、言ふは易くして行ふことは困難である。特に嚴格なる規制を以て束縛せられずして、一つの団体が規律あり制裁あり、所謂一糸乱れず整然として其団体が所期の目的を達することは、

団体所屬の各員が各自責任と義務とを知ることによって始めて行はるのであって、実に困難なる事であります。当校も一つの団体であります。

吾輩の所謂自由啓発的教育を完うする為めには、職員と学生とは、一層の緊張と奮励とを要することと思ひます。我邦の現状と将来とを慮へば斯の如き組織の下に修養を積ましむことは、最も肝要のことであると思ふのであります。又斯の如く教育せられたる人物でなければ、とても国家の良材となることが出来ないと考へるのであります。諸君は充分此の主意に共鳴して、自己の責任と義務とを自覚せられんことを切望します。

今や国家は人材を要すること益々切であります。特に年少氣鋭の人材を要します。諸君は、速かに業を卒へ、研究事項なり又事業なり、何れにしても自分に適應せる方面に向ひ、若くして責任の地位に就き、社会に独立の地歩を占め、諸君の父兄を光榮ならしめ、又諸君の国家を光榮に導かれんことを切に希望する次第であります。

(大正九年四月十三日授業開始に当りて)

### 無試験無採点主義

本日、横浜高等工業学校並に神奈川県立商工実習学校の開校式挙行に際し当局としては文部大

臣閣下、神奈川県知事閣下來賓としては清浦子爵閣下を始め朝野の貴顕多数の御臨場を忝うし、且つ御懇篤なる祝辞並に御奨励御鞭撻を賜はり、洵に二校の光榮之に勝るものがありません。茲に両校の教職員学生々徒一同を代表し、謹んで、厚く御礼申し上げます。

此無上の光榮に浴する機会に於いて、私は両校の校長として、此両校が如何にして相提携するに至りたるか、又此両校が今後如何なる抱負を以て其發展を図るか簡單ながら、茲に一言することとは、私の当然の義務であり、且つ此開校祝賀に賛同を忝うしたる來賓閣下各位の御盛意に酬ゆる所以であると存じます。

私は、東京高等工業学校の前々校長手島精一先生の門下生であります。手島先生は我国工業教育の先覚者であつたことは、世既に定評があります。而して先生の工業教育に於ける本領は、寧ろ工業徒弟及び工業補習教育の方面であつたと私は信じて居ります。私が先年当校経営の内命を受けました時、窃に先生の志を継承し、其本領とせらるゝ所を本校に於ても聊か実現せしめたいとの希望を懐いて居りましたが、私の微力なる、斯くの如き計画は前途甚だ遼遠の事と思つて居りました。然るに大正八年九月、故安部幸兵衛氏は老百万円を公共事業の経営として神奈川県に提供せられました。此資金使用に就いては、県の当局及び横浜市の之に關係せられた方々並に県政に参与せらるゝ諸君と私共との考が幸にして一致共鳴し、茲に設立を見るに至つたのが、実に此の商工実習学校であります。私の宿志が斯くの如く容易に又速かに成立したことは、実に望外

の喜びでありまして、故安部氏に対しては云ふも更なり、県及び市の各位に対し、厚く感謝の意を表する次第であります。横浜高等工業学校は実業学校令及専門学校令により、工業に従事せんとするものに高等なる學術及び技芸を授くるを以て目的とし、目下、機械工学、応用化学、電気化学の三科が設置せられて居ります。修業年限は三ケ年ではありますが、學理に相当する実地の技術を練習せしむることは、此短日月を以てしては容易の事ではありません。故に技術の練習には特に實際的工場の訓練を要します。

仍て、商工実習学校は実地に重きを置いて居ります。工業部の方は本校即ち横浜高工との連絡上また同じく三科を置き、修業年限は五ケ年で、其各工場は營利的經營に立脚せしめて居ります。此工場では、本校の学生にも亦實際的經營に当らしめ、技術的の訓練を茲に補ふことゝ致すのであります。商業部の方は此実地工場の經營即ち原料の買入、製品の荷造り、運送、販売等に就き、実地練習を致すことゝします。本校は実習学校により多大の利便を得ると同様に、又実習学校も本校より多大の利便を得ることゝ信じます。斯くの如く相提携以て唇齒輔車の關係にあることは、即ち兩校并立の主旨に外ならぬのであります。

次に本校は実習学校と異なり、文部省の直轄であります。然れども、其所在よりして、至大なる關係を当市及び当県に有して居ります。即ち此程度の専門学校として、所在地と交渉なしに超然孤立することは出来ません。広く我国の製造工業の實際と常に聯絡交渉を有たねばなりません。

ん。而して、特に私の希望する所は、何よりも先づ県及び市の実業方面との緊密なる聯絡關係であります。即ち是等と善良なる理解を有ちたいと思ひます。具体的に云へば県及び市の諸工場は我兩校の爲めに差支なき限り開放せられ、我が教授及び生徒の見学に資せられたのであります。同時に諸工業会社に於て技術上の困難なる事件に遭遇せらるゝに於ては、本校に交渉を願ひたいのであります。本校は其教育の余裕ある限り、又本校の可能である限り、其等技術上の困難を排除する事に努力致したのであります。是等は本校として当然の義務であります。猶本校は横浜なる最も光榮ある貿易港に所在する特殊の關係より、学校が自発的に一つの特色を具備したき一事があります。是れ所謂殖民地的物産の研究であります。外国にては之が研究に特別の講座が設けられて居りますが、本邦に於ては未だ之を試むるに至つて居りません。当校に於ては特に此点に注意し、支那を始め南洋南米に至るまで、工業上の物資の研究に努力致したく、既に其端緒を開きつゝあります。此点に就き只今川口広島高等工業学校長の御宣伝を忝うしたることを感謝致します。

以上学校の本領及び其特色を發揮するに於て、豊富なる国家の援助を期待することの切なると同時に、当県及び当市の同様なる後援を懇願して息まざる次第であります。

最後に、本校が是等の希望抱負を以て、如何に学生を薰陶するかに就き一言を許されたいのであります。教育の根柢とする精神は、先帝の下し賜ひたる教育勅語を遵奉するのであります。而

して、本校が昨年四月授業を開始以来、特に標榜して居りますものは、自由啓発の教育主義でありまして、勿論教育勅語より流れたる一滴に過ぎないのであります。

之を論じ之を宣伝するは易きも、実践の難きを看取し、本校は従来の採点的試験制度を断乎として廃棄致しました。之が為めに特に懇篤を極むる教師の指導と学生の自覚、自発を絶大に要求して居る次第であります。

自発的修学は、独り真正なる学業の成績を収むるのみならず、又学生の品性陶冶に影響する処至大なるものあらんと信じて居ります。業を卒へて社会に立ち、責任を重んずる人、名節を尚ぶ人、彼は頼しき人、彼は苦節を共にするに足るの人と我も許し人も許す人格者は、無理解なる束縛より脱し、監視なき自由の環境に自発的の薰陶を授けらるゝことに因って、より多く輩出することゝ確信し、所謂試験的勉強より、青年学生を解放致しました次第であります。

(大正十年十月二十九日開校式に於て)

### 無罰無賞主義

本日は、特に後藤子爵閣下には大なる御家庭の御不幸後であり、且又国家公私御多用の折にも拘らず、御来臨、一場の御教示を賜はることは、洵に感激に堪へぬ処であります。

卒業生諸君、三年螢雪の功空しからず、本日の光栄を獲られたるを衷心より喜びます。又是等卒業生を指導誘掖したる教官諸君の丹誠及び終始諸般の事務に服したる職員諸君の勞に對し、私は学校長として厚く感謝致します。卒業生諸君が今日の如き光栄に浴する事は、畢竟我國家が諸君に期待すること大なる為めである。諸君の責任は、此の期待に孤負することなきを祈つて息まざる次第であります。諸君は又、我校第一回の卒業生である。諸君の今後に於ける業績如何は我校將來の運命に影響する処尠からぬのであります。然らば諸君は二重の責任を有して居るものである。社会に立つては須らく國土を以て任じ、同窓の間に於ては先輩を以て任じ、以て其実績を挙ぐることを今後一日と雖も忘れてはならぬ。本校は、大正九年四月開校以來屢々宣言主張致しました主義方針なるものがありません。

本校は、実業専門学校として工業に関する高等なる學術技芸を教授致しますが、是等の上に猶特に注意を傾注して居る事項一二を簡単に申し上げます。

第一國家の歴史や哲学の上に基礎を置きたる社会及び經濟の知識を獲得せしむる事でありませ。是等の知識は実業界に立つ人々に、円満なる徳性涵養の材料を供するものと信ずるからであります。

第二には國際的工業の開拓であります。是れ横浜と云ふ光栄ある貿易港に設立せられたる地理的に必然的な計画であると信じます。

本校創立日猶浅く、是等の特色を發揮するの充分なる機会に接し得ずと雖も、銳意此方針に進行する積りであります。後者の主義の爲めには、本校は既に昨年三月在外研究生として、教授を蘭領印度及び海峡殖民地方面に派遣し現に此方面の化学工業を調査研究せしめつゝあります。又今回の卒業生中にも、今後直に海外に渡航し事業に従事し、研究に没頭せんとするもの兩三名あること、我校の方針が実行の端緒に就きたるものと觀察して居ります。

猶、本校は教育の方針として自由啓発主義を採り、従来の試験制度を全廃し強制的試験勉強より学生を解放し、自己の責任を重んじ、自発的の勉強に由り、其課程を卒へしめました故、今日の如き盛典に際会し、其儀礼に相應しき各種賞品の授与特待生優等生の表彰等は全然行はぬのであります。是れ、我国憲法の政治自治の制度に順応し、社会に立ち独歩の地位を占め、責任を重んじ、名節を尚び、虚偽を退け、正義を社会に奉ずる人は、斯の如き主旨に抛り教育せねばならぬと信ずる爲めであります。

閣下各位、此の如くにして今日九十二名の卒業生を社会へ初めて送り出します。不幸にして一般工業の不景気に際会致しました。特に、化学工業が甚しきに拘はらず、当校は二科迄化学工業に属して居ります。然れども江湖の同情に依り大なる困難を見ず、各方面に略ぼ就職の途を得ましたことは実に欣幸とする処であります。

卒業生の業績如何は、今後世間が実証して下さい。学校としては至大の注意を払ふ処で

あります。是等の新人物中には必ずや高材逸足、所謂千里の馬あることゝ信じます。幾多の駿馬あることゝ信じます。

併し之を鞭つに其道を以てせず、之を食つて其材を尽さしむることが出来なければ或は、駑馬に等しく空しく槽檻の間に駢死せしむる惧があります。是れ亦我校が鋭意教育に尽すと共に、弘く社会の識者に希望する処であります。何分にも、閣下各位並に江湖の厚き御後援と御鞭韃とを、今後益々仰ぎたい次第であります。

(大正十二年三月十七日第一回卒業式に於て)

### 名教は自然なり

卒業生諸君、三年、五年、又は二年の螢雪の労空しからず、予定の学課を修め、学校所期の教養を全うし、今日を以て目出度く校門を出でらるゝことは、実に慶賀すべきことで、私は衷心より御祝申上げる次第であります。

教職員諸君、以上の卒業生を出すために、諸君の努力と丹誠との尋常ならぬものがあつた事に對し、私は此目出度き卒業式を挙行するに当り、学校長として感謝措く能はざる処であります。特に商工実習学校に於ては幼少なる生徒を収容し、而も五年の長きに亘り教養の労に服せられた

る主事初め教職員の方々に、特に感謝の辞を呈します。又我々職務を尽すに当り、文部当局及市の当局の方々が復興多事の折柄、始終面倒なる事柄にも能く御了解を下され、御援助下されたる事を厚く感謝致します。高等工業学校の卒業生諸君、第一回并に第二回の卒業生即ち諸君の先輩は、既に社会に於て活動しつゝあります。而して、決して本校卒業生たる名誉を恥しめて居らぬことを信じます。諸君、亦出でゝ社会の実務に当る人たると、更に進んで、高等の学府に学ばんとする人とを問はず、益々奮励以て本校に於ける修養を社会に延長し、諸君の先輩に孤負することなきを希望致します。

商工実習学校の卒業生諸君、諸君は第一回の卒業生である。一家に取っては長子であります。今後多くの弟妹が続々と生れ出づるべきである。諸君の業績は今後の出身者に影響する処決して尠くない。最先輩として、諸君の責任亦大なりと云ふべきであります。切に諸君の奮励努力を望みます。

工業専修学校卒業生諸君、諸君の修学は一種の苦学である。昼間各種の職業に従事し夜間に所定の学課を修業したのである。諸君は一方には第一回の先輩と、他方には今後輩出すべき諸君と相提携して、益々我横浜の工業発展の爲め、一層の努力を御願ひ致します。

来賓各位、学事報告にて申上げた状況の下に、只今三校の卒業及び修業者合計二〇八名に、証書を授与致しました。而して此多数の有為なる青年を来賓各位一般社会に御紹介申上げる事は、

私の最も光榮であり、且つ愉快とする處であります。所管は異つて居りますけれど、以上三校共何れも自由啓発主義により教育を実行致しました。只今まで屢々此学校の主義に就ては、発表の機会を得た次第でありました。而して今日本校としては第三回、実習学校としては第一回、専修学校としては第二回の、卒業式を挙行するに当り、其五ヶ年の久しきに亘り、未だ嘗て所謂校規に触れ校則を破り、其れが為め停学若くは放校等の処分を受けたる者の一人もなかつたことは特に申上げたき事項であります。併し斯の如き不都合なる者は、皆無であつたかと云へば決して左様ではありません。三校、一千有余の青少年を集め、校規校則に一人も触れるものゝないと云ふ様な感化のある教育は私校長を始め教員一同、余りに不徳且つ無能であります。只少数を罰して多数を懲らしめ或は少数を賞して多数を奨励すると云ふが如き方法よりも、之を懲らさず之を賞せずして、全校を挙げて相互理解に導き、自治自覺の下に教育し又教育せられると云ふ根柢に立つて努力したまでゝあります。我学校の教育は、子弟を教養して新たな人物を作つたとは、毛頭も学校としては考へて居らないのであります。発達すべき天賦の才能、進歩すべき天稟の徳性は、夫々各個人に宿つて居るものと信じて居ります。我自由啓発主義の教育は、是等天賦天稟の才能徳性を阻害することなく、自由に其発達を促進せしむる、即ち名教は自然であると心得て只管努力した次第であります。麗かなる春の日光と、恵風慈雨を投げ与へた積りであります。而して其生育した苗木を今社会に提供するのであります。此の苗木の中には、将来亭々として天を摩

する幾多の喬木あることを信じます。其苗木たる三校の学科課程には各差別がありますが、苗木としては何れも然か信ずるのであります。而して是等の苗木は如何なる地味の所に移植せらるゝか、如何なる肥料が施さるゝか、如何なる保護が与へらるゝか、此二百八本の苗木の将来に就いては、切に來賓各位及び一般社会の理解ある御後援と御鞭撻とに俟つ次第であります。

申し後れましたが、本日は前大蔵大臣井上準之助閣下が特に我々学校の卒業式に御來臨下されましたことは、学校并に卒業生一同の光榮と深く感謝に堪へない次第であります。

政府が我高等工業の設立を決定したのは大正五年でありまして、当時閣下は正金銀行の頭取として当横浜の御在職中で、其創立を思ひ立たれ且つ御尽力下された結果であることは隠れたる事実であります。されば、閣下は横浜市とは深い御関係があり、本校とも亦浅からぬ因縁があると存じます。閣下の御尽力によって出来た我学校の校舍は其設備と共に、一昨年の大天災の爲め一朝にして灰燼に帰し、今日は昔の其の面影を只此バラックに残して居るのみであり、又閣下と関係深き我横浜市は其建築物、其橋梁、其道路、今日親しく閣下の御覽の通り、実に悲惨の状態であります。今日社会に送り出す我二百八人の若き学生等は、何れも此大天災に遭遇し、つぶさに其の苦難に処したる者で、天災よりの復興に大なる決心を有して居るものであります。国家棟梁の材たる閣下と、復興未だ半ならざる此の横浜市で、而も此バラック講堂の内に警咳に接し得ることは、一層其の決心を緊張せしむる所以で、私も亦一市民として閣下に感謝措く能はざる処で

あります。

(大正十四年三月十七日第三回卒業式に於て)

### 三 体 一 心 教 育

我が三校は各其監督官庁を異にして居りながら、弘陵の一角に、渾然として打って一丸をなし、其学科の程度、種類も、可なりの差異あるに因せず主義方針を一にし、其歩調を乱さず、協調を旨とし、よく互助の精神を發揮し、和氣霽々裡に教育事業の途を辿り来りたることに對し、私は学校長として特に此機会を以て深甚の感謝と敬意とを同僚諸君に表します。

学事報告に於て述べたる如く、本日は高等工業より百二名、商工実習学校より七十六名工業専修学校より七十二名、合計二百五十名の卒業生を出しました。昨年三月の卒業生二百八名に比し四十二名の増加で、此多数の青年を今日來賓閣下各位に御紹介し得ることは、三校の我々同僚一同が非常なる愉快とする処であります。是等の青年は、申すまでもなく将来君国の重任を背負つて立つ処のものであります。偏に閣下各位の御指導と御鞭撻とにより、成功させたいと希願して息まぬ次第であります。大正十二年の大震災は、人類が経験したる天災の最も慘憺たるものであります。而して、今回卒業したる青年の多数は此災害に学生として際会し、我々と其苦難を共

にしたる同志であります。而して本校としては、其最後の学生を出すので、私としては実に名残惜しい感じが致します。

彼の天地を焦す火焰に直面したる青年、あの凄惨なる破壊と、無数の同胞の目も当てられぬ残骸の間を奔走したる青年に由つて、復興の大業は成就せられなければならぬのみならず、偉大なる人物を此天災が生み出すものと私は確信して、銳意災後の教育に当りました。爾来少くも我校の復興成らぬ中は、卒業式にも、記念祭にも、礼服を着用しないと我々同僚が一致して居るのは単に節約をすると言ふ否な消極主義の觀念からではありません。只以上の確信を固守せんとする一片耿々の志に過ぎないのであります。我二百五十名の卒業生が、在学中に於て其学業に顕はれたる成績の如何を問はず、此の雰囲気の中に螢雪の功を積みたることは、彼等の将来に何等かの意義が潜在することを信じます。何卒来賓各位の御引立を重ねて御願ひ致す次第であります。

再び、卒業生諸君に一言します。男子苟も世に立つ、其出処進退を公明にし責任を重んじ、名節を尚ぶべきに就いては、嘗て其意見を諸君に陳べたる処で、我校一覽にも其記録を残してあります。当時是等の問題に就き高橋是清閣下にも言及致しました。閣下は、大政党的の總裁として、貴族院よりも衆議院に席を求めんが為め華族の栄爵を辞し、平民宰相原前總裁の選挙区に、裸一貫となりて其輸贏<sup>ゆえい</sup>を争ひたる偉観は、私は只教訓と考へた。私は、政党政派には無関係であることは勿論で、只自分の職責上から之を以て一大教訓と考へたのであります。

今日、此卒業式の盛典に於て、諸君は親しく閣下の警咳に接し、垂示を蒙むる事を得るは、至大の幸福と存じます。閣下には、春寒料峭の折柄にも関せず、御老体を以て、態々御来臨、卒業生一同に対し御演説下さることは、我々三校のもの一同光栄と感謝に堪へぬ処であります。

(大正十五年三月十七日第四回卒業式に於て)

### 職業教育と自由教育

私は今日の如き機会に於て、屢々本校の自由主義教育に就き御話を致して来ました。実を申せば、私は現代教育に於て、尠からず不満を感じて居る一人であります。私の眼には多くの学校と云ふものは、皆単純に職業的教育を施して居るのみの様に思はれてなりません。即ち学校に於て理学、工学、法律、経済等を学んで技術家となり、弁護士となり、判検事となり、官吏となる、畢竟職業を目標とする教育に過ぎないのであります。此為め立派な技術家が出来て、鉄道や、電気事業や、其他のものが能く設備せられて凡ての事が便利になり、官吏や法律家が揃って社会の組織や制度の樹立に努力を致しませうが、夫れで決して人間社会が安定せらるゝ訳でもない、幸福が増進せらるゝ訳でもない、又国家の基礎が堅実になつたとも考へられないのであります。

歐洲に於て近代異常の発達をした職業教育の跡を観れば其功過は明白であると思ひます。即ち

世界大戦争を起して、彼の悲惨極まる末路を作りました。今日我国人にして歐洲各国を視察し、其銳意回復を計りつゝあると云つて、其勉強振を三嘆するものが多くありますが、悟らずんば悲惨の末路を又繰り返すに過ぎないかと思はれます。歐洲の職業教育に倣ひたる我教育も、最早や既に行き詰りつゝあることは、各方面の不平不満より觀ても明らかなきことと思ひます。

勿論我国に於ても、技術の練習のみでは不可である、知識の習得のみでは不可である、人格養成と相俟つて初めて教育が完成せらるべきであるとは、何人も語る処であります。而して其人格養成には如何なる主義、如何なる方法に抛るやと云へば、勤勉であれ、忠実であれ、信用を重んぜよ、曰く何、曰く何等々と凡ての道德の目次を列ねて、之を奨励鞭撻し、若し之に違反するものがあれば悉く之を懲戒処罰すると云ふ所謂道德主義教育を加味して居る許りである様に思はれます。無論加味して居ることは決して不可でない、併し此道德主義教育は一方から觀れば賞罰主義、猶極端に云へば万事が懲戒主義教育とまでなつて居るのでなからうか、頗る疑問である。而して之は教育家自身が既に道德家であり、又人格者であると云ふ立場から出立して居るかの様に考へられます。果して然らば之で現代青少年は満足し得るでありませうか。

故に彼等の学校に在るや、心あるものゝ多くは、不満ながら不平ながら其校規校則に服従し、唯無事に卒業証書を得、卒業者の特権により就職の機会を望んで居るのみで、学校を以て彼等が真に生きたる愉快的修養の場所と考へず、従つて人生に対する明るい気分を消失し、共存共栄の

奉仕的精神を消磨するに至らしむるものと思ひます。

故に社会に出でては、自己の価値に生きることを忘れ、正義に立つことを忘れ、金力や権力に生きんと焦慮するに至り、幸にして成功せば其得たる金力や権力に沈溺するに至ることさへあるは実に慨歎すべきであります。然らば深甚の考慮は徒に利害得失にのみ払はれ、朝には此の主義、夕には彼の主義、と臨機応変のことのみ流行し、恰も迷へる羊而も大なる迷羊が現はれ来ることに、誰しも不思議を感じないであらうか。是れ畢竟我国職業教育の弊竇である（へいとう）と信ずる外はありません。道德主義の教育も茲に至れば無力であります。假令無力ならずとも、微力であるとは信じません。

是れ我等の学校に於て所謂道德主義教育を踏み越え、自由主義を採り之を根柢として、職業教育をなすつゝある所以であります。

此自由主義から割出したる施設に就ては、既に声明したるものは若干ありますが、茲に更に一つを添加するものは無処罰主義であります。過去七年間に於て我三校は何れも之を実施して居りますが、就中最も其試練に苦辛したものは商工実習学校であります。而して終に未だ一人も処罰いたしません。罪惡を犯したるものを校門の外に放逐して学校は浄化したとは、決して考へられません。停学を命じたとして必ずしも改悛が期せられるものとは信じません。処罰主義教育によつて何処に共存共栄の意義がありませうか、何処に奉仕的精神がありませうか、何処に社会互助主

義がありませうか、無処罰主義の実行には我実習学校は、其学校を所謂社会事業にまで延長し、自ら其重任と苦痛とを背負うたことは実に涙の事業で、若干の教師に対しては特に深甚の敬意を払って居ります。

併しながら我校の自由主義教育は決して徹底して居るとは申しません。只日夜我々は其徹底に努力して居るのみであります。斯の如き主義主張の下に今年も二百八十有余の人物を出しました。来賓各位並に我社会が何卒是等青少年を御鞭撻御引立下さるやう玆に御紹介を兼ねて御願致します。

申し遅れましたが、今日は田男爵閣下には春寒料峭の折柄御多用又御遠路の処、態々御来臨、我卒業生の為め一場の御教訓を賜はることを厚く感謝致します。大正十二年の暮閣下が農商務大臣を挂冠せらるゝや、我校は閣下の名節を慕ひ我校学生々徒の教訓の為め閣下の御来校を願ひ御快諾を得ましたが、偶々御家庭の御不幸の為め、当日の学生々徒は親しく警咳に接するを得ず遺憾に存じた次第でありました。

爾来既に三星霜、我校も漸次成長し、又其主張しつゝある海外発展の気運も更に濃厚を加へて参りました。閣下は久しく南洋協会々長として、重大なる海外発展の機関を御統卒になつて居られます。此際閣下の御教示を得ることは我々の光栄且つ幸甚と致す処であります。

(昭和二年三月十七日第五回卒業式に於て)

## 文化と芸術

卒業者諸君、諸君は所定の課程を終へ、螢雪の功を全ふせられて、今この盛典に列せられたことは諸君の喜びは申すまでもありますまい。諸君の父兄に於かれても門に倚って諸君の錦衣帰郷を待たれてゐることゝ考へ定めて満足であらうと察する次第であります。

教職員諸君には又過去一ケ年間不断の努力と不拔の精神、寛大なる態度を以て教養を続けられた功績に就ては、この会に於て深甚の謝意と敬意を表するものでございます。

本校は今や内外の経営順調に進み、自由主義の旗色が漸次濃厚を加へつゝあることは誠に同慶に堪へぬ次第でございます。

来賓閣下各位、只今証書を授与致しました通り、本校百四十六名、実習学校八十八名、専修学校百五十二名、合計三百八十六名の卒業者を輩出致しました。これ等の卒業者は我々の校是によりまして所定の学業を終へ、今日校門を出でて社会に進出致します。爰に御紹介申上げまして、同時に其前途の祝福と御同情、御後援を併せて御願ひ申上げます。

本校の卒業者は本回を以て第六回と致しますが、中で建築学科は本年始めて三十二名の第一回卒業者を出すものでございます。就きましては貴重な時間でございますが、一言述べることを御

許し願ひます。

御承知の通り大震災火災によつて東京、横浜が忽ち焦土と化しました際に、敢然として立ちました横浜復興会は原富太郎氏を会長とし、災害復興の爲めに勇氣と熱心、其意気は天を衝くの慨を示したのであります。

今猶當時を想起致しましても其壯烈なるに血湧き肉躍るものがございます。

然して我が横浜復興会は大正十二年の十月十六日に工業部会を開きまして我横浜高工の復旧を速かにし、既設三科の外に土木、建築の兩科を増設すべきことを議決致しました。又続いて總會に提出してこれ又議決致しました。この決議は時の岡野文部大臣に上申しましたところ、この議が容れられました大蔵省に廻附されましたが其後迂余曲折を経まして兩科の内建築の一科のみを大正十四年四月より開設さるゝに至りました。此れ全く原、井坂、中村、平沼、石塚、出口等復興会員諸氏の異常なる努力がこの結果となつたものであります。この記憶すべき建築科の第一回卒業者を出しますことは誠に感慨の深いものでございます。同時に産みの親たる横浜復興会に満腔の謝意を表するものでございます。又横浜復興会に於かれても定めて御満足の事と察するのであります。

私思ひまするに、一國の文化はどうしても其國の有する芸術によつて批判さる可きものと考へるのであります。一國芸術のうち最も重きをなすものは建築でございます。建築は芸術の最

も大にして、最も秀でたるものと言ふことが出来ましよう。

然らば何故に芸術は重んぜられるかと申しますと、それは一々人間の工夫創作によって出来るものだからであります。これ芸術が一国文化の上に重きをなす所以でございます。更にこの芸術上に於て建築が重きをなす所以は、その時代々々、その社会々々の各相は建築によつて後世に残されるからでございます。即ち建築は文化に芸術に必須のものと言はねばなりません。

文化を形造るものは建築の外に発見、発明等の要素があります。例へて申しますと現代文化の表現と致しましては自動車、飛行機、ラヂオ等はいづれもそれでありませぬ。然し自動車、飛行機、ラヂオを持つもの必ずしも文化国であり、文化人であるとは申されませぬ、現に之等の諸機械は我国にも沢山あります。然らば我国の文化であるかと申しますと、遺憾ながら只だ持つてゐると言ふ丈けであり他所のものを使用してゐると言ふ丈けであつて決して我国の文化とは申されないのであります。何となれば只だあると云ふ点から言ひますれば、馬來半島にも瓜哇にも、スマトラにも、ボルネオにも、セレベスにもあるのであります。故に其国の文化とするには其国の発明であり創作であり、機械芸術を以つて作り上げたものでなければなりません。

我国は世界の一等国と誇り、三大強国と誇つてゐます。何故一等国であり三大強国であるかと申しますと、それは軍備の点に於て偉いと言ふ丈けでありまして、文化の点から申しますと誠に  
お恥しい次第でございます。我国は文化の点から申しますと常に債務国の立場にありまして、曾

って債権国とはなり得ないのでございます。果して然りと致しますれば我国は後世文化史上に一等国として將た三大国たりとして歴史を残すことが出来ましようか甚だ寒心に堪へない次第でございます。

私どもはどうかして文化の債務国から脱して債権国とならねばなりません。それには我國民が奮起一番、その償却に任せねばなりません。この意味で本校建築科はその義務を負担し、其義務を果したいと思ふのでございます。本校の各科は単に建築科に限らず機械工学科にしる、応用化学科にしる、電気化学科にしる、いづれも同じ精神を以って教へ、学んでるのであります。工業国家奉仕の実を挙ぐることを眼目と致してゐるのでございます。この点は本校各科のみならず三体一心であります、商工実習、工業専修両校に於ても同様であります。三校は斯くして所謂打って一丸となり文化促進の第一線上に立つことに努めてゐるのでございます。

今日の式日に当りまして我々三校はこの精神の貫徹に精進するものであることを私から社会に宣言致します。

終りに臨みまして鎌田枢密顧問官の御來臨は一同の最も光榮とするところでございます。閣下は若くして偉大なる市民教育者でありました福沢諭吉先生の創設せられました慶應義塾に学ばれ、後先生の衣鉢を承けて育英に従事せらるゝ事久しく、又近くは文部大臣として將た貴族院議員として国家に尽され、殊に文部大臣としては本校の為め多大の御援助を賜ったことを感謝致し

ます。

閣下は年を重ねられて愈々益々御健康であり、又其思想は稀に見る穩健にして、然かも新味を含蓄せらるゝ点に於て平素敬服し、敬意を表してゐるものでございます。今日只今この偉大なる教育者の馨咳に接することは一同の教訓上裨益するところ多大なるを信じ厚く閣下に御礼を申し上げる次第でございます。

(昭和三年三月十五日第六回卒業式に於て)

### 創作力の潜在

私は此機会に於て、学校長として過去三ヶ年間に於ける諸君の御努力と御丹精に対し深甚の感謝と敬意を表します。今日卒業生に授与した卒業証書が四百七十枚ありますが諸君の努力と丹精は決して一樣のものではありません。或る一枚のものには、他の数十枚に相当する、献身的努力と苦痛が伴つてゐることは、私として見遁がすことの出来ない次第で、此点に於ては特に実習学校の同僚諸君に何時もながら多大の感謝を表する次第であります。

来賓閣下各位、私は此卒業式を挙行する機会に於て多数の出身者を閣下各位に御紹介申上げることが、学校年中行事中に於ける、最も快心の事と感ずる次第であります。

本日高等工業学校が第七回で、卒業生は百四十一人、商工実習学校は第五回で百八人、工業専修学校は第六回で二百二十一人、総計四百七十人であります。卒業生の総数は高工は八百二十三人、実習は四百四十三人、工専は五百八十人、総計千八百四十六人であります。

我々の学校は創立以来自由啓発と無処罰とを旗印として奮闘して参りました。御承知の通り、三校共国立、県立、市立と其所管は異なつて居りますが全く同じ主義主張の下に所謂三体一心となり、努力し来つたのであります。

私は考へますに、学校の経営として、最も努力を要することは校風の樹立にありと思ひます。古人の句に『清風徐に来つて、水波起らず』とあります。校風も徐々に吹き興すと波瀾を生ずることがなからうと存じまして、急かすせず、同僚一致して不断の努力を続け、爾來九年となります。九年の歳月は短いとは言へませぬが、学校の生命から見れば、実に短日月であります。然して此九年の間に靡げながら、校風の或る形が生じて来つゝあるのではなからうかと想像せられて喜びに堪へぬ次第であります。

吾校の標榜する自由啓発は、校風の根元とならなければならぬと考へます。然して其意義の根柢には創作力の動きが潜在して居ると言ふ事は、最も大切な点であります。人間の職業は広い意味に於ては凡て芸術的であります。芸術は創作を求めて邁進するものであります。

凡そ国民が創作力を失ふときは、其国家の帰趨する処は、国際間に於て労働国になるより外な

いことゝ存じます。其大切なる創作力は自由啓発の洗礼を受けたるものにより、其大成が期せらるゝものであると考へます。短を棄て長を採ると言ふことを金科玉条と考へる如きは、自由啓発の洗礼を受けざる者の言であります。

此点に於て吾校の最も喜ぶべきことは、昨年より教授及び講師中より、学位論文の提出により、五人の理学博士を輩出したことゝ、又実習学校より有為の教育者を出したることであります。勿論之等の方々、其天稟の素質と努力とによりてかち得たる美しき賜物であります。何れも創作の途を辿り行くもので、自由啓発の学風に陸離たる光彩を添へたるものと信じ、欣快に堪へざる処であります。

人或は質実剛健の青年を養成するとか、勤勉努力の人を作るとか申しますが、人間はしかく餘細工かしんこ細工の様に思ふ儘の人物と言ふものが養成せらるゝものでありましようか。私共の微力に於て其困難なることを能く承知いたして居ります。

学校教育の第一義は訓練にあらずして、自覚にあり、責任に直面して自覚する、研究に対して自覚する、困難に対して自覚せしむるにあります。然して自覚の要諦は自由啓発の学風を樹立するにありと信じて居ります。其適切なる例を示し下さった同僚に対して私は深甚の謝意を表し、且つ吾校を祝福してゐる次第であります。

此等の人々は教育界の勇将であります。又自由啓発の学風の下にある者は皆勇将ならざるはな

しと信じます。勇将の下に弱卒なしとせば、此如き教師の訓育を受けたる我青年は決して弱卒ではなく、何れも一騎当千の若武者だと信じます。只今此等青年四百七十人を来賓各位並に社会に御紹介申上げるとは、我校の最も快心と致す処で御座います。何卒彼等の前途に多大の御同情と御後援を願ひ上げます。

終に臨み、申遅れまして、甚だ恐縮であります。高田総長閣下に御挨拶を申し上げます。早稲田大学の前総長大隈侯爵には、私は不幸にして、御生前親しく御警咳に接するの機を得ませんでした。然しながら侯爵の偉大なる御性格の数々の内で私に取って大なる教訓は、侯爵は至って賑やかな事、至って景氣の好き事聊かも陰気臭いことのない事、然かもそれが侯爵の失意の時も得意の時も終始一貫して其様に觀察せられたことでありました。

早稲田の学風も又侯爵のそうした御性格を充分に発揚して居る様に感じ、平素敬慕して居る次第で御座います。私は学校の経営に就きましても、其様に考へて居ります。勿論学校でありますから、真面目で質実であることは根柢であります。同時に景氣よく賑やかに面白く、陰気臭いことのない様にと努力して居るのであります。そうした方面から致しまして、閣下を迎へて此卒業式を挙行することは我校の実に欣快と致す処であります。

猶又今日閣下を御迎へ申上げるとは、更に重大なる意味があります。それは我校の創立と、閣下との関係であります。即ち大正五年吾校の創立に決裁を与へられたる時の文部大臣は、閣下

であつたからであります。然して最初に其献策をなしたる人は、当市の中村房次郎氏で、同氏も今日御来場を辱ふしたる次第でありまして、此の実に因縁深き御両氏が御揃ひで本日御臨場を得ましたことを深く光榮と致しまして特に感謝の意を表する次第であります。

(昭和四年三月十五日第七回卒業式に於て)

## 国家的目標

徳川幕府の長い治平は元祿、享保、天保と次第に打ち続く太平無事に馴致せられ、輕佻浮華の習ひが次第に増長しました。其間幕府の政治家に、又俊髦偉材なきにしもあらず。而して屢々革正の衝に当りましたが、頽勢を挽回すること能はずして、三百年の幕政も終に擾乱の裡に倒潰しました。明治維新の爲め四民平等、職業又自由となりし爲め、茲に新しき生氣を得まして、五ヶ条の御誓文は春光慈雨の如く、幕府とは全く別天地の下に、我國家は異状の進歩發達の途を辿るに至りました。

かくして維新回天の大業を遂げました。我國民は鎖國の夢を破つて、世界の舞台を見渡すと、忽ちにして亜細亞大陸の衰微敗殘の悲惨なる状態を見ました。而して茲に民族的活眼を開く事となり、國民当時の目標は、其民族的覺醒と共に、亜細亞大陸、即ち東洋諸國の勃興の爲に、揮身

の努力を以てするにあり、其等の結果は二十七八年役となりました。勿論其が為めには長い間清国は我國民の目標でありました。

日清戦争後の十年間は、真に臥薪嘗胆の國民生活でありました。誰か遼東半島還付の、詔勅を捧読して泣かざるものあらんやです。勿論目標は軍国侵略主義の露国でありました。

爾來國民は目標を失つて了ひました。世界戦争は我國に黄金の波を打ち揚げましたが、所謂權花一朝の夢となりまして、残す処は輕佻浮華の惡風と腐敗墮落の余弊のみでありました。其時々政府は産業立国を唱導するも、何れの国が能く産業立国ならざるものあらんやであります。

或は産業合理化を云ふも、当然過ぎる程當然なことであります。而して在朝在野、何人も今日國民の目指すべき目標を指示するものがありません。今日国家最大の通弊は、其目標を失ひしにありと思ひます。産業立国、産業合理化等々を掲げて我國民を何処へ連れ行かんとするのでありますか、其目標は何処にありやであります。

私は思ふ、我國が目指すべき目標は米国にありと。即ち米国の資本帝国主義の圧迫より脱することが、其目標でなければならぬと考へます。

併しながら時勢は転化しました。私は米国を以て往年の清国露国と混同して居るのではありません。又混同して居ると考へらるゝことは、私に取って迷惑至極であります。

国家が一つの目標を有して居ると云ふことは國民的向上の源泉であり、米国とても、多年英國

を以て、其目標としたことであらうと考へます。米國又以て私の意氣を諒として可なりと思ひます。

對外的國民の意氣の衰へたること今日より甚しきはなく、今日にして國民的發展の目標を自覺して、奮起するに非らずんば我國の將來は、我々の子孫は資本國たる資格を失ひ、一勞働國となり、外國の資本、特に米國の資本、により、衣食するの外なきに至る憂なしとせずであります。

國民の目標は、將に米國の資本主義壓迫より、脱するにありと思ひます。米國が一步を進まば我又一步を進まねばなりません。彼五歩を進まば、我又五歩を進まねばなりません。彼十歩を進まば、我終に十二歩を進むの勇氣と氣概に、始終しなければなりません。

彼の人種差別待遇を見るべし。軍縮問題を見るべし。太平洋會議を見るべし。更に我學校と、密接の關係ある、北平雙橋無線電信を見るべし。産業立國も、産業合理化も、國民的目標なくして可ならんやであります。

私は斯の如き信念を以て、平素我等の青年に接して居ります。今日此機會に於て其片鱗を申し上げたる次第であります。果して私は見當違ひの目標を、立て、居るや否や、謹んで誨を乞ひたいのであります。只國家の憂は、目標なきにありと信じます。

次に我校も今年一月十九日を以て、創立滿十ヶ年の経過を見ました。大震災火災以來、既に八年建築、造船の兩科を加へ、其内容は拡大いたしました。全國に比類なき、破れ小屋で、努力

して居ります。満十ヶ年の祝賀会を催し、盛儀を極めたきは、素より願ふ処でありますが、一方国家経済の難局より、他方我復興建築の未だ着手だに至りません故に、此満十年を迎ふるに当り何等特別の祝賀を催さず、一意国家奉仕の前途を見かけて、勇往邁進いたす許りでありまして、之れ一同の快心とする処であります。只商工実習学校に於きましては、此機会を以て、創立の資金を寄附したる、故安部幸兵衛氏を記念する為め、記念事業会を興し、本年十一月一日の学校創立記念祭を卜し、其記念事業を完成したいと、只今奔走中で、既に其事業を世間に発表してあります。御承知の事と存じますが、何分の御後援、御賛同を願ひ上げます。

十年の歲月、人生としては決して短きにあらず。久しきに亘れば人情又自然緊張の意気を、消失するの憂があります。自由教育又自覚主義の受難を思はざるに非らずであります。併し自由教育も、幾多の受難と試練を経て能く達成すべきであると覚悟致しまして、此十年を一期に三校の職員子弟と更始一新の勇気を以て、今後に処したい覚悟を持って居ります。

終に本日御来臨を忝ふしたる、桜井先生に就き一言さして頂きたいと思ひます。又先生に御許しを願ひます。私は明治二十八年と記憶します、当時中等学校の教師たる免許を得る為めに、検定試験に応じました。而して先生は其当時の検定試験委員でありました。曾識ぞうしきのなき私が、偶然のことから、先生の知遇を得て、爾来御指導と御後援を蒙る様になったことは、私の生涯に於て、不思議なる幸運であったと、今に感じて居ります。又先生の、御令息の御一方は、当校第一

回の出身者であります。先生を態々当校卒業式に御来臨を煩はしたることは、実に恐縮の至りであります。先生と本校とは以上の關係に於て実に深い因縁が存して居るのであります。

先生は帝国学士院長であり、又枢密顧問官であります。学者として、又官吏として、最高の地位を占められて居る、先生の如きは実に稀れなる方であると存じます。

我々三校の一同は、今日此の卒業式の機会に、先生の高風に接し得ることは、実に光榮の至りであります。

(昭和五年三月十五日第八回卒業式に於て)

### 指導的精神

我高等工業学校及商工実習学校は、昨年を以て早くも創立満十周年を経過いたしました。別に誇るべき事跡とてもなく、又学校の年齢としては、拾年は僅かの歲月でありますから、別段取られたる記念祭事業等を致さず、些かな内祝で済ませました。

唯商工実習学校は此機会に於て、創立者阿部幸兵衛氏の胸像を、同校庭に建立して記念いたしました。而して此れが費用を弁ずる為に、故阿部氏縁故の方々に向つて、一般的に資金の募集をいたしました。総計金九千五百円を得たのであります。其内三千余円を胸像建設費に充て、残

金五千余円を以て阿部記念奨学会を設立し、苦学の子弟を補助するの途を開き、永久に阿部翁を記念し得るに至りましたことは、我等の最も欣快とするところでありまして、此機会に於て寄附者諸賢に深甚の感謝を致す次第であります。

猶右金額の内三千余円は、我商工実習学校教職員及生徒が、三年と五ヶ月の間に於て、毎月零細の醵金を積立て得たもので、事実上に於て胸像建設の資に相当するものであります。回顧すれば彼の大震災災による我横浜の復興は、市民の自力に俟つべきであり、市民の自力の発揚により初めて世間の同情が生ずべきであるとは、震災当時我等市民の意気でありました。我商工実習学校が此の市民最高の意気を如実に現出したることは、実に快心の事と思ひます。今後校庭に於て、我等教職員及生徒は、日夕此胸像に対し、独立自主の人故阿部翁の颯爽たる風貌を仰ぐと共に、胸像建立の事業を想起し、我実習学校精神教育の尊き俤として永へに残ることゝ信じます。

次に本年度の卒業生は本校百四十四人、商工実習学校百十人、工業専修学校二百二十三人、合計四百七十七人であります。而して世間一般不況のため、卒業生の就職難には実に閉口するのであります。然るに今年は、卒業期を繰上げて、既に二月中旬南洋に渡りましたものが二人あります。猶此中旬には更に二人の同方面行が予定されて居ります。併し此等は例外のことで一般には容易ではありません。然し何れも頭と腕を鍛へ上げたものでありますから、其処に自信を持って、各自の努力と学校の斡旋で、何とか都合をつけたいと思つて居ります。

現下社会の情勢を觀察いたしますと、教育界は左傾思想防圧と、卒業生の就職、上級学校への進出とに没頭して、他を顧みるの余裕がない有様であります。文部当局に於ても亦同様であります。国家最高の目的や、国民の帰趨何れの辺にありや、全く指導的精神に欠如して居るかの様に考へられます。此れは独り教育界のみならず、凡ての方面に於ても亦然りと言はねばならぬことは、真に痛嘆すべきことであります。

卒業生諸君、今日は金子堅太郎子爵が、特に諸君の前途を祝福せんがため態々御来臨下さいました。而して憲法制定に関する御話を拝聴し得ることは何よりの幸福と存じます。憲法の我国家にとりて大切なことは申すまでもありません。而して其草案は故伊藤博文公であつて『万機献替二十年、典憲編成奏御前』の七言律は、公爵が憲法発布を詠じたる名作で、私は此詩を誦ずる毎に、公爵が経倫の政治家としての堂々たる風格を偲び、自ら奉公の念に燃えしむるものであります。公爵の幕下に股肱の人材として其草案に最も研鑽苦心を極めた一人は、我金子子爵であります。斯の如き憲法制定に由緒ある方の馨咳に接し、其来歴を拝聴することは、実に諸君と共に幸福に存するのであります。

今日は恰も偉大なる一国民から、国家に対する遺言を聞くが如き心地がいたします。将来我家の重責を荷ふべき俊髦の子弟は、今其心得で傾聴するものと信じます。彼等は将来に於ける我憲法の忠実なる擁護者であります。皇室中心主義も、一君万民主義も、社会奉仕、共存共栄皆憲

法より湧き出づる最高の道徳であります。

明治大帝の憲法制定の御精神は、万古不易の我国体の、特殊性の根源に由来するものにして、時勢と歳月に超越したものと信じます。其適用に於て、寸毫も謬りなきことを期すべきであります。謹で今日の子爵閣下の御講演を感謝いたします。

(昭和六年三月十五日第九回卒業式に於て)

## 一 君万民主義

昨年の第九回迄は、県立商工実習学校も、此卒業式に参加致しまして、所謂三体一心を標榜したる県と市と政府の合併卒業式でありましたが、昨年私が実習学校長を勇退致しました為め、今年からは両校のみの卒業式となりました。併し乍ら他方本校に於て、今年最初の造船工学科及び、附設工業教員養成所、各第一回の卒業生を輩出致しました事は、実に本校の慶賀と致す処であります。

前年東京及び大阪の高等工業学校が昇格して、各工業大学となるに關聯し本校には新に電気工学科が増設せらるゝ事になって居りました。本校又其準備に着手して居りましたが、増設実施の前年、即ち昭和三年に至り、大阪高等工業学校の造船工学科は、元来神戸高等工業学校へ行くべ

きでありましたが、神戸高等工業学校は土木工学科を選択したる為め、其儘に致し置かば全国高等工業学校中に於て造船工学科が無くなる事になりました。文部当局に於ては、多少其点に憂慮する処がありましたので、当校は進んで此造船工学科を引受け、既定の電気工学科を棄てたのであります。果して、此交換が当を得たるか否かに就ては、其衝に當った私としては絶へず責任を感じて居る次第で御座います。

抑我国は所謂海国で、第一、造船工業は是非世界何れの国よりも、優るとも決して劣つてはならない覚悟を持たなければならぬ。第二、横浜は貿易港たる事を忘れてはならない。第三、造船工業は大量生産の許されないもので、特に我国情に適應した大工業であると云ふ觀念を持つべきである。第四、飛行機及飛行船は、今後異常の發展を見るものと想像して差支なからう、而して船舶は海を行き、飛行機及飛行船は空を行く、故に其流体力学上の原理は海空殆んど共通のものであります。即ち、造船工学は航空工学と、其軌を一にするものであります。其れが為めに、本年造船工学科を卒業したる二十二名中の若干は、特に航空、即ち飛行機に関する学課を専攻したるものであります。さらば将来、我造船工学科は名実共に海と空との工学に分科するか、更に進んで航空工学科として独立するかの運命を持って居ります。果して此が実現を得ば、我が造船工学科を選択したと云ふ事は、決して誤れりと云ふべきで無いと考へるのであります。

而して、此が実現に關しては、我校の所在地たる横浜市並に、神奈川県下の賢明なる方々の御

後援を偏に仰ぐ次第であります。即ち以上四ヶ条の考慮が、我が校が造船工学科を選択した理由であります。

工業教員養成所も、又本年第一回の卒業生を輩出致しました。教育の改造問題は多年朝野の懸案であり、政府当局に於ても、既に其所謂教育制度改革に就き其具体案を提出し、昨年諸方面に一大衝動を与へましたが、何等なす処なく終に事止みとなりましたことは、遺憾千万であります。凡ゆる国民生活の状態は、教育と因果関係を有することは勿論のことと存じます。さらば国民生活の行詰りは又教育の行詰りで、随て教育の改造を叫ぶるゝことは、当然の事で有ると考へます。然るにも係らず、教育制度は無論の事、其教育の精神と云ふものまで、殆んど旧により改善せられない様に思はれます。即ち、相変らず詰込み主義、知識偏重主義、卒業証書万能主義が最も有力であります。

我が校は時流に慣はず、自由教育十年、無試験、無採点、無処罰の三無主義を奉じて、奮闘して来ました。素より不完全にして、遺憾の点尠からずと雖も、附設工業教員養成所は、即ち、此雰囲気の裡に、其最初の卒業生を出しました。他日国家教育の、靈知異材が此内より生じ来らん事を、期待して止まざる次第であります。

卒業生諸君、今日憂国の人士が口を開けば、国家多事又国歩多難と申します。特に満洲及上海事件に就ては、我国は全く國際的孤立の状態になって居ります。斯の如きは開国以来、未だ嘗て

なき処であります。滿蒙に關しては私は大正四年に、東蒙古に於ける天然曹達を探險して、鉄道其他の交通機關なき當時、鄭家屯洮南附近を踏査致しました。爾來滿洲及支那各地へは數回来往致しまして、滿蒙と我國との關係に就きましては、常に留意致して居りました。大正十四年に支那より歸りました機に於て、我校に大陸會を創立致しました。我國と亞細亞大陸との間には海がない、我國は亞細亞大陸の東端である。凡ての國策が、此趣旨より画策されねばならぬと云ふ根拠から、此會の名稱が來つたのであります。

而して市内の有志と、本校と協同して、滿蒙支那を研究し來りました。昨年滿洲事變の勃發するや、我校は率先して、滿洲軍慰問使を派遣し、且つ慰問金の募集及各所に於ける講演等に由て、大に國民の土氣發揚に勤め、更に又、臨時的滿蒙研究会を組織して、各方面より滿蒙研究の實績を挙ぐる事に努力致しましたことは、滿蒙に留意する私に取つて、又一大會心の事でありました。

國家有為の青年が、今日の如き國家多端、國歩艱難、國際的無援孤獨の時局に直面して、國家の成立と、其動向を認識體驗し得る事は、他日國家棟梁の材となる素地を作る事に於て、又此上なき好機會で有ると信じ、卒業生諸君に向つて祝福せねばならぬ事と存じます。

其れに就ては、我國家は凡て、天皇の大權と、御稜威の下に、動きつゝある事の根源を直覺する事でありませぬ。即ち、皇室中心、一君萬民主義の下に動きつゝある事を、深く體驗認識せらる

事と存じます。

国家の一大事に当り、其根柢に動く真のものを握み得たるものは真の国民であります。

卒業生諸君、今日は前の司法大臣嘉道閣下が、特に諸君の為に御来臨下された事は、独り諸君の光榮のみならず、我校の大に光榮と致す処であります。

閣下は我国法制の大恩人であります。而して唯今は、枢密顧問官、又法制審議会副總裁として、国家最高の機関に御参与御努力になつて居ります。

閣下の如き御閱歴と崇高なる御人格の方の、御声容に接する事は将来有る青年諸君には大なる教訓と存じます。

(昭和七年三月十五日第十回卒業式に於て)

## 非常時 日本

本日卒業証書を授与せられたるもの、本校並に教員養成所を合せて百八十一人、横浜市立工業専修学校に於て百八十人、総合三百六十一人であります。之を創立以來に致しますと、本校並に教員養成所に千四百六十二人、工業専修学校に千四百四十九人あります。過去一ヶ年此等卒業生を養成する為に教職員各位の御努力は尋常ではありませんでした。思想混乱の世相の裡に動

揺し易き多数青年を指導誘掖して、其針路を誤らしむることなく、国家の目的と其帰趨を理解せしめ、失職者の多き事業界の風波の中に、職を求めて安処せしむる等、並大抵の骨折ではありませぬ。特に我自由教育は細心なる注意と、大胆なる施設を要します。実施以来既に十有三年未だ嘗て其城壁の一角だも崩さず、歩一歩づゝ其所志の目標に向つて進行しつゝあるを見るは実に快心の事にして是れ実に各位の不断の努力と、崇高なる犠牲心の発露に外ならないと信じます。私は学校長として、此機会に於て深甚の謝意を表する次第であります。

両校の卒業生諸君は夫々規定の勉学を卒へ、今日校門を出ることは実に慶賀に堪へません。特に諸君の父兄に於ての喜びは察するに余りあります。

諸君の在学中は、実に我国として内外多事、所謂非常時でありました。内に於て政治経済思想共に安定する処なく、特に昨年二月より五月に亘り、一種の暗黒時代をさへ出現しました。外に於ては満洲及上海に於ける戦乱と、国際聯盟の波瀾がありました。其等に就ては屢々私が此壇上より所見を吐露し諸君の注意を促し、且つ参考に供しました。一方諸君に於ては、他に率先して、慰問使を満蒙の奥地まで派遣し、或は視察団を送り、寿府、上海派遣軍及関東皇軍へは、激励又感謝の電文を致し、校内に於ては満蒙研究会等を組織し、我校健児として赤心報国の意氣を表示し得たことは、実に多とするに足ると存じます。我全権の寿府を退去したることに由り、所謂大風一過の觀があります。聯盟脱退が余儀なかつたことは、我外交の失敗であるか否やは、別

の事として苟くも世界の外交場裡に、四十有余国を相手にし其所信を主張して、一步もまげざる其態度は我国外交としては空前の事に属し、帝国の威信又大に発揚せられたることは、実に痛快の至りであります。此の如きは万古不易の我国体に帰因することは勿論でありますが、又一方に於ては我国工業の進歩發達が貢献することの尠からざるは、何人も否定すること能はざる処と存じます。

回顧するに、我国の工業は戦争の度毎に長足の進歩をいたしました。就中世界戦争の時には、特に目醒しき進歩發展を遂げましたが、爾來十有余年、之を現今の状態と比較いたしますと、又隔世の觀があります。大戦後打続く大不況の裡にも、独り工業技術上の進歩發達は、実に確實なる針路を辿って進展して来たことは、実に我国として、非常に心強き次第でありまして、私をして、転々好景氣は粗製濫造を恣にせしめ、不景氣は技術の進歩を促進せしむるの思ひをなさしめます。

諸君は、在学中体得したる、非常時の我帝国、学得したる専門的智識、自由啓発により練磨したる人格、何れも貴重なものでありますが、猶至って貧弱なものと存じます。今後世に立ち社会を以て学校の延長と心得、造次顛沛にも向上修養の途を忘れず、益々其包容を大にし、又技術家たりと雖も、天晴国土の風を以て、一層君国のために尽粹せられ、我国工業の充実に勤め、国威發揚に貢献せられんことを希望いたします。

來賓各位、本校の創立は大正九年でありました。当時既に不景氣の風は全国に吹き渡り、相当に就職難の聲がありました。大正十二年に初めて卒業生を出しましたが、景氣は更に回復せず、卒業生の就職が困難でありました。爾來十ヶ年にして、今年初めて稍愁眉を開きました。

併し景氣が良からうが、悪しからうが、卒業したものが如何なる地位にでも就職を為さしめ、其処を得せしめなければなりません。何卒閣下各位の御同情御後援を仰ぎ度く、懇願する次第で御座います。

我校の出身者が、其成績が佳良であると賞讃をされますれば、我々教職員にとっては此程嬉しい事があります。同時に其成績が悪いと非難されますれば、我々教職員にとっては、此程参考になり、又刺戟になるものではありません。

併しながら此等の批判を聞くにつけ、時とすると私に一種不満の感を起さしむることがあります。それは優良な卒業生であると、何だか其工場に能率のよい機械か、器具を購入したかの如き思ひを為さしめ、劣等なものであると悪い機械か、器具を購入したかの感を持って居らるゝこととであります。今度購入した機械がとても能率が良い、此では金が儲かる、今度の機械は非常に故障が多い、此ではやり切れないと云ふ様に、全然人間と機械を混同して居られる様であります。併し此は決して東京や、横浜での事ではありません。悪しからず御容赦を願ひます。

或は広き意味に於て、左様な理屈になるのかも知れませんが、人間と機械との間には、其処に

何等か、根本的の相違があることを、確信いたして居ります。故に今日流行する、管理工学即ち能率増進法とか、事業の合理化と云ふことに於ても、能率や事業其物のみを攻究して、人間を除外した法規を作ったならば、何時かは其弊を受けるものと、私は想像いたします。米国や独逸や其他、外国ならいざ知らず、我国では必ず其弊があります。如何となれば、法律に於ては人間の自由は、其等外国で能く確保せられて居るかも知れませんが、人間天賦の自由は、より豊かに、我民族が社会的に保有して居ると信ずるからであります。

此の如き問題は、平素私の頭に断へず来往する処のものであります。来賓各位には、平素御懇親を忝ふする方々でありますから、機会を得て御垂教を賜はらば幸甚の至りで御座ります。

此は一つの楽屋話してありましたが、今一つお聞きを願ひたいことがございます。其れは我校に於ける震災記念資金部の事業であります。彼の震災当時、災害の爲め学資金に窮した学生は約十四人程ありました。幸にして神戸高工、秋田鉱山専門学校等から若干の慰問金がありましたので、其れに職員在學生及び卒業生其他よりの寄付金を加へ、茲に震災記念奨学資金部が創立されました。爾来十ヶ年間に、資金の調達に一方ならぬ苦勞を致しましたが、最近発明を奨励する目的を以て組織せられた、公心一円会が解散して、其資金約五千円の寄付を受け、茲に本部は思ひがけなき幸運に際会しました。如何に貸与を受けた学生が、安心して本校に其勤学を継続しつゝあるか、又其父兄が如何に喜びつゝあるかが、察すべきであります。特に公心一円会の如きもの

を、私をして容易に組織せしめ、又其清算に由て、其多額の資金を寄付せられたるが如き、公心一円会員各位の御同情と、御理解は何と感謝を申上げて宜しいか、只々感激に堪へぬ次第で御座います。

最後に再び卒業生諸君、今日の卒業式に深井日本銀行副総裁が、目下財界多難の際、態々御來臨を忝ふしましたことは、実に光榮の至りであります。

私は久しく副総裁の知遇を忝ふして居る一人であります。副総裁は、新聞記者から身を起したのでありますが、極めて学究的の御方であると私は存じます。若し天下が太平無事であったならば、其学究的の態度は、記者生活より転じて、学校生活をするか、著述に従事するか、兎に角純然たる学者として、其盛名を為したことに、想像致します。然るに日露戦役があつたために、副総裁をして終に財界の実務に当らしむるに至りました。

至る処可ならざるは無き副総裁は、実務の方面で、今日に於て一大々家となられました。

而して其本来の学究的態度と、其蘊蓄せられたる智識は実務の大家としての副総裁に、陸離たる光彩を添へ来り、今日他の追従を許さぬ処があると、私は深く認識して居るのであります。

今日副総裁を御招待申上げ御話を承る様にいたしました事は、私が卒業の諸君に贈る餞として最善のものかと存じます。希くは諸君は、副総裁に憧憬して、学校に於て得たる内容を、今後に於て、幾十倍、幾百倍せられんことを。

(昭和八年三月十五日第十一回卒業式に於て)

## 青年教育と国防

昨年来、我言論界に於て賛否交々起りたる教練の振作即ち、所謂軍事教育なるものは、愈々本校に於ても去る四月の新学年より実施せらるゝ事となりました。本校教職員及び学生中には、最初から之に反対するものが無かつたのみならず、寧ろ之を積極的に賛する点に於て、既に豊富な資料と準備とが久しく蓄積せられて居りました。故に其実施に当りては、何等の支障を見ず今日迄実に順調なる進捗を見るに至りました。是れ、他方には最初の配属將校田中忠三郎少佐が時勢と青年とに対する理解を有し、且懇切熱心なる努力によるものであつて、特に同少佐に感謝する次第であります。

学校教練の目的が、学生の心身を鍛錬し、団体的觀念を涵養し、併せて国防能力を増進せしむる為であることは、是れ当局の学校教練に期待する処であつて、何人と雖も、異議はなからうと思ひます。然れども、学校として此教練の目的に直面正視するとき、訓練と国防との二大条件に對し、採るべき手段を如何にすべきかは、自然と解決せらるべきものがある様に思ひます。本校の如き自由啓発の教育を施す所に於て、理解なき第三者より見る時は、如何にも自由放縱で規律も節制も無きが如く思はれませうが、事實の真相は決して然らずであります。

『特に厳格なる規律を以て束縛せられずして、一個の団体が規律あり、制裁あり、所謂一糸乱れず整然として其団体が所期の目的を達することは、団体所屬の各員が、各自其責任と義務とを知る事に由つて、初めて行はるゝものであります。』

是れ、本校が、開校以来、標榜せる処で全校打って一丸となり、共に甚大の努力を此点に傾注し來つたのであります。此貴重なる訓練に我団体が刀折れ、矢尽き今更に軍事教育に、之を委ねばならぬ必要を認めてゐない。併しながら、国防に至つては大に然らずである。世界大戦以来、人類の平和を唱導することが、大に普遍的になつたことは、世界人類の爲めに祝福すべきであります。然れども何人も国防を不必要とする者はない、一旦不幸にして外国と戦端を開かんか、今日の戦争は昔日の夫れと大に其趣を異にせるは言ふ迄もありません。仮令へば、明治年間に於ける我々の二大戦役に於ては、大体戦線に立つて居る戦士さへ健闘して居れば国民全体は大なる危害を感じませんでした。併し、今日飛行機や、潜水艇や、其他の武器が使用せらるゝに於ては、我日本帝国全土が敵に対して危害暴露せらるゝものと見なければなりません。国家の干城と国土とを以て任ずる青年は国防の技能と知識とを養成し置かずして、何を以て国民全体が枕を高くして安んずることが出来ませうか。一朝、有事の時に当り独り戦線に在る陸海軍の戦士にのみ国家の安危を託して以て事足るべき時代は、既に遠く過ぎ去りました。今日の青少年教育に於て国防の一科を加ふることは時代の要求であり、最も必要である。故に国防は軍事教育の第一条件とし

なければならぬ。規律、節制等の訓練的効果は其副産物であります。我校自由啓発、自覚自治の訓練が又是に由つて百尺竿頭一步を進むるものとして、深く期待して居る次第であります。是れ我校全体が今回の軍事教育に対する見解であります。

(大正十四年六月十二日学校教練実施に当り)

## 工業の實際と学理

本校は、横浜市及び其附近の工業と特に密接なる関係を有し、工業の實際と学理との接触を計る必要があるを以て、先年有志と共に横浜工業懇話会を組織し、工業及び工業教育に従事するもの、之が興味を有するもの等相会合して、工業に関する名士の講演を聴き、更に所見の交換をなし、氣脈を通じ、以て斯業の向上發達に資する処があります。之が会合は専ら本校が主催幹旋することゝなし、其第一回を大正十一年五月十六日横浜銀行集会所に開催したるが、爾來会を重ねること百回十年を経て昭和七年五月十周年記念大会を開き、昭和八年三月第百八回例会を開くに至りました。現在会員二百数十名でありまして、創立以来退会者が少なく、常に一定数の会員数を示してゐることゝ、会費の集金率が殆んど百パーセントに近い好成績を示してゐることはこの會が、直間接に横浜文化史上に何等かの貢献を示してゐることゝ信じます。又同時に本校が實社

会との連鎖上裨益するところの多いことを信じます。

(横浜工業懇話会の組織)

### 海外発展の旗幟

大正十四年、本校、商工実習学校及び工業専修学校の教職員有志と、三校学生々徒有志の尽力と校外有志諸君の協力とにより、大陸会と称する団体が組織せられ、十月三日盛大なる発会式が挙行せられ、会員後藤藤新平子爵其他の講演がありました。同会設立の趣旨を左に抄録します。

狭隘なる地域に多数の住民を支持せんと欲せば、広く天然資源を海外に求め、工業を隆盛ならしめ、其製作品を海外に輸出する方策を樹てざる可からず。実に工業立国の大策を講ずべきあるのみ。特に工業家が広く海外事情に精通するの肝要なるは固より論を俟たず。幸にして我横浜の地は帝国の門戸に位し、広く世界に通じ、正に天涯比隣の觀あり。現代の国民に課せられたる帝国内容の充実は、洵に此地に起てる吾人の雙肩に懸りて特に重大なるを覚ゆ。我が横浜高等工業学校は、其の創立と共に海外発展の大旗幟を掲げてより既に六星霜、歐洲大戦後の不況に次ぐに關東大震災を以てし、復興の大業未だ半ならず、国歩艱難を極む、此秋に吾人の素志益々熾烈を加へ、吾人の抱負を貫かんとする意志愈々鞏固なるものあり。茲に同志相謀り、

大陸会を組織し、互に研鑽攻究を重ね以て此重責に当らしめんとす。

本会の創立以来、卒業生の海外に雄飛せるもの支那方面を初め墨国南米に及びつゝある事は、本会の快心とする処であります。特に今次の滿洲上海事変並に国際聯盟脱退に至る経緯に当りまして、或は慰問使を送り、或は視察団を送り、或は激励、感謝の電報を送って国難を共にした次第であります。猶今後も一層その使命の爲めに最善の努力を尽さんことを期してゐます。

(大陸会の組織)

### 互助精神の發揮

大正十二年の大震災によつて学費支給の途を絶たれ、修学甚だ困難なる学生に対し、当面の救済を図り且此天災の試練を永久に記念せんが爲め、本校事業の一として『震災記念奨学資金』募集の挙を企て、其醸金を以て、当時遭難の在学十数名に支給し、同十五年三月を以て是等全部の学生を卒業せしめました。而して其後猶学資補給を要する学生に対し、其目的を達せしめんが爲めには、同資金を漸次増殖するの必要あるを以て、茲に新に『互助主義拾銭会』なるものを組織致しました。同会の趣旨は、全校職員学生に、一喫の煙草、一回の電車賃等些少なる節約を慫慂し、各自毎月拾銭以上の零細なる金銭を各学級に配置したる醸金箱に投入せしむるのであります。

す。其醸金は更に震災記念奨学資金に繰入るのでありますが、幸に各自互助の精神を發揮し、其成績優良にして年々数名の学生に学費を補給して居ります。互助主義拾銭会は独り本校職員学生のみならず、この趣旨に共鳴せらるゝ公私団体個人から進んで寄金されてゐますが、就中互助主義公心一円会より多額の寄金を得ました。猶震災記念奨学資金より補給を受けたる学生は、卒業後其支給額を返済する規定になつて居ります。然し無利息なるが為め、幾年かの後に於ては奨学資金の多くを減少するの虞れなしとしません。是れ鋭意互助主義拾銭会を以て之を補ひ、且つ増長せしむる所以であります。目下奨学資金は一万二千四百余円に上つてゐます。

(互助主義拾銭会の事業)

## 名教自然と雅号由来

入愚亭独嘯（昭和十七年八月十五日発行）より

母校の校庭には、横浜工業会の御骨折りで立派な「名教自然」の碑が建つてゐる。この碑、この文字が校門を入れて第一に目につくところから、今では母校の名物となり、又スローガンとなつてゐる。ところがこの名教自然と言ふ文字は、この碑を建てる為に考へついで書いたものではなく、その文字の起源は可成り古い歴史をもつてゐる。

なんでも私が母校へ来て、間もないことである。何かの拍子に名教自然と言ふ文字が頭に浮んだのである。言はば靈感とでも言ふのであらう。私は無論それ以前にこんな文字を知つてはゐなかつた。他人からその出所をよく聴かれたが、それに答へることは出来なかつた。それどころか、事実私自身もこんな熟字があるかどうか、甚だ疑問であり、突込まれて尋ねられると寧ろ当惑したものである。

然し私はその出所の如何や、成句の存否に拘らず、この名教自然を口誦む毎に、何かしら或爽快な暗示を受けるのであつた。こんなことからこの文字はよく頼まれた揮毫や、記念帖に悪筆を揮つたものである。

何故こんな事が自然に浮んで来たかを考へて見ると、学校も創設時には色々の問題が起り、又私自身も自由啓発の理想をいだいて、色々教育上の問題を考へてゐた時であつたが、忽然この名教自然の成句を得た瞬間、身は無碍の境地にあり、思無邪の聖域に置かれたのである。その時の晴れやかな気持は今猶新たなるが如く記憶に残つてゐる。

ついでこの頃のことである。ふと岩波文庫のうち、那珂通世博士著支那通史を読んでみると、思ひがけなくその西晋章のうちに次の文章を発見して、全く別れた兎にめぐり会つたやうな気持ち  
がした。

王戎は竹林の七賢の一なり。朝に立ち、匡教する所無く、時と浮沈す。性復た貧吝にして、田園諸洲に遍く、牙籌を執つて昼夜會計す。家に好李有り。人其種を得るを恐れ、常に其核を鑽つ凡そ賞拔する所は、専ら虚名を事とす。阮咸の子瞻、戎に見ゆ、戎問ふて曰く「聖人は名教を貴び、老荘は自然を明かにす。其旨同じきか異なるか」と瞻曰く、「将無同」(将た同じきこと無からんや)と、戎吝嗟すること良久しうして、遂に之を辟す。時人之を三語の掾と謂ふ。

この句中にある聖人は勿論孔子、孟子を指したもので儒教であり、老は老子、荘は荘子を指すものである。「名教自然」の語は一句の中に存在してゐて、然かもその一句の中に孔子、孟子、荘子、老子の四聖人を一括網羅してゐるのである。

尤もこの句の成り立った、立役者である王戎は余り感心した人物でないことは、文中自ら明か

なことであるが、兎に角世に言ふ竹林七賢の一人であるから、相当の人物であったことには相違ない。

この王戎に瞻が会った時の話である。王戎は瞻に名教自然の間答をしたのであるが、瞻はたった三語の「将無同」で明答した。王戎はこの勝負で立派に黒星を貰った。そこで仕方なく瞻に職を与へたのである。瞻にするとたった三語で職にありついたのであるから時人がこれを三語の掾じよ、即ち三語の属官であると言ふ話である。

して見れば母校の名教自然の碑は、就職に縁のある碑とも言へやう。若し失職の人があれば、碑に向つて礼拝をせらるれば、腰弁当位にはなれる靈験があるかも知れない。又そこで自慢をすれば、この碑の建つて以来の母校の就職率のよくなったのも、実はこの碑のお蔭であると言つてもいゝかと思はれる、但し碑の角をかいて懐中してゐても失職しない為のお護符にはなるまい。

私に悪筆の道楽がある。この道楽の始まつた抑々の動機が諸君の上にある。その話をして見たい。私は学校を引受けて、創立に當つた際に一番心を痛めたことは、如何にして善良な校風を樹立するかと言ふことであつた。一校の校風を興すのは容易なことではない。少くも五年十年の歳月を費してかゝらねばならぬことである。そうして一度樹てた校風は、これを革めることは仲々容易なものでないのである。そこに校風樹立の苦心は存するのである。

この悩みを続けてゐる際であつた。学校の柔剣道場が竣工して、最初の試合が行はれた。その

お祝ひの記念品として、手拭を染めて来会者に贈ることとなり、その手拭に書く文字を部員から頼まれた。私は性来の悪筆であり。丸で自信もないし、況んや揮毫などをした覚えのないことであつたので、この依頼には少なからず当惑した。そこで折角であつたが断りを言つた。然し部員の方ではどうしても、聴入れて呉れないので、仕方なく渋々承諾はして見たものゝ、この処置には全く閉口した。

窮すれば通じたのが、習字のカンニングだった。赤壁賦の法帖を一冊手に入れて見てゐるうちに、「清風徐に来て水波興らず」と言ふ一齣があつた。この文句が思はず私をして膝を打たしめた。そこで「校風徐興」の成句を得た。然しこの四文字のうちの風徐興の三字はこの法帖のうちにあるが、どう探しても残る校の字が書いてない。せめてその扁なり作なり一方でもあればと思つたがそれも無い。そこでこれは諦めて校の字丈は自作と決めて、手習ひに取掛つたのである。やつとの思ひで書き上げて、兎に角私の処女作品が手拭に染まつた訳である。その後の或日のこと月出東山君と言ふ書家が私を訪ねて来た。この東山君は学校の教育勅語や戊申詔書や震災前の卒業証書と、今でもある校門の校名銅標を書いた人で、斯道の大家である。

私は自分の書いた手拭を東山君に示して、その文字の批判を求めたのである。すると東山君は暫く黙つて見てゐたが「先生これには抛りどころがありませんね。」と云つた。私はこれでギャフンとなつて了つて二の句が出なかつたが、更に勇を鼓して尋ねた。「この四字のうちではどの字

がいゝでしょう。」私の肚では四字とも甲乙はない筈である。それ丈けに自作の校の字が可愛いかつたのである。ところが東山君は「校の字がいけませんね。」と再び痛い所を衝かれた。私はこれで完全に打ちのめされて了った。矢張り斯道の大家は違ったものである。無駄に修業はしてゐないものだと思ふ感じ、泌々驚いたのであった。

このことが奇縁となり、その後卒業の記念にと揮毫を求められたが、私は自分の書は手拭に染めて台所につりさげられる位が関の山で、台所を出て玄関や居室に出袈張る資格のないものだと、言ふ理由で断つたのであるが、とう／＼これも断り切れないで、ぼつ／＼需めに応じたのが、心ならずも筆の道楽まで進展して来た訳である。これまで随分悪筆を揮つて処々にさらされてゐることは、甚だ心苦しいことであり、いつかは一つ筆供養でもしなければならぬと考へてゐる。

ところでこの書から当然派生した問題は、字を書く以上雅号が必要なことである。そこで雅号の即製にとりかゝつた。この頃新聞に諸名士の雅号の由来が連載されてゐる。色々面白い挿話があり非常に興味をもつて読んでゐる。私はこの新聞に出る名士にはその足下にも及ばないが、単に雅号の挿話と言ふ点になると大いに語るべき挿話を持つてゐる。

始め私が雅号を考へた時に、先づ頭に浮んだのは、羊と言ふ字であつた。羊は第一私の生れ年である。又至極柔和な動物であつて、有用な動物である。そうして平和的な動物である。是非この羊の字を織込んだ雅号を拵へたいと思つた。然し羊丈けでは雅号にならないし、その相棒の字を



何にしやうかと考へたが、一向いゝ智慧が浮んで来なかつた。そこで衆智を蒐めることにして、誰れ彼れにそのお智慧拝借を頼んだのである。その一人の飯塚晶山君の如きは、実に十数種の雅号を書いて呉れた。

然しどうも氣に入つたものが一つも出て来ない。そこで他力本願を捨て、今度は自力で又考へて見た。羊と言ふ字は既定の事実とすれば、問題はその上の一字である。上だそうだ上だと口づさむうちに上なら天だ。天より高い上はない。といふことに考へ及ぶと難問は忽ち氷解した。「天羊」それでいゝ。私は即座に天羊と号した。

この天羊はその後二三年間頗る無事平穩に用ひ慣はされたのであつたが、或時当時武徳会々長の本郷房太郎大將が来校講演された後、校長室で学校の道場の為に「文武不岐」の揮毫をされ「栗洲」と署名された。私は傍からこの栗洲の雅号由来を尋ねると、大將は無雜作に、自分は丹波の生れである、丹波栗から思ひ付いての雅号であると説明された。これを聴いた瞬間、私の心は郷土愛から出発した大將の雅号に頗る共鳴したのである。

私は直ぐ大將に私の雅号改変を声明した。私は四国の生れである。四国人は物真似上手なところから四国猿と言はれてゐる。そこで爾来「猿洲」と私は号したいと大將に言ったのである。然しその後僅か半日か一日位で又心境に異変を生じて、猿洲を廃棄して、「煙洲」とした。これは猿は煙に通じ、然かも私の最愛する煙草に通ずることが、私の氣分を表すに最も相応しいからで

あった。

煙草は私の往くところ、どこにもあり、私の目醒むる間その手を離れることはない。その愛する煙草の煙が雅号に取入れられたことは、自分ながら嬉しくてならなかったのである。私は爾来この煙洲を愛用し、将来も愛用するであらうことを爰に明かにして置きたい。斯くして私の雅号は三度変遷し、三度目の正直によって本極りとなったのである。只だ不幸なのは間に挟まった猿洲である。三日天下ならぬ、二分の一日天下に終った為に遂に署名としてこの世の中には書き残されなかったのである。気の毒な猿洲の為に、最後に謝意を表してこの稿を終りたい。

(二四・一一)

## 病床閑話 私と煙草

### 入愚亭独嘯 (昭和十七年八月十五日発行) より

その一

私が煙草を喫み始めたのは、二十五六歳の頃からであったと記憶する。その当時喫んだのは、岩谷の天狗煙草とか、村井のサンライズなどであった。いづれも時代の流行煙草であった。勿論まだ政府の専売制が布かれない以前のことである。

こんな訳で初めは、紙巻煙草許り喫んでゐたが、紙巻煙草から葉巻煙草に移ったのは、明治四

十一年の秋独逸に滞在した時のことである。私はその時ハノオバアと言ふ古都に居た。私の下宿してゐたのは、老人夫婦の家であつた。この老主人は煙草好きであつたが、紙巻は一切喫まないで、葉巻だけを喫んでゐた。然かも面白いのは一週に一本、それは日曜日の昼食後に喫むと言ふ掟を定めて、これを厳格に守つてゐた。

この老主人が葉巻を喫む時の光景は今でも眼前に浮ぶのであるが、食後に葉巻を一本持ち出してそれを指の間に挟んで見たり、又掌の上にかけて見たり、暫くの間は丸で珠玉を鑑賞してゐるやうな様子である。その顔つきも如何にも嬉しさうに相好をくづして居るのは、傍で見る眼も楽しく朗かなものであつた。

そうして後に始めて、火をつけて、如何にもうまさうに、煙の一吸ひ一吐きを味ひながら静かに紫煙を立てゝゐた。寧ろ煙草を喫むのではなく、煙草を食ひ又味つてゐるかのやうにも見えたのであつた。

私がこの時喫んでゐたのは、矢張り紙巻一点張りであつた。ところが、老人は食事の度毎私に紙巻は咽喉を害して、衛生上よくないと言ふことを力説して、葉巻を喫むがよいと、頻りに勧めて呉れた。余り熱心に勧められるまゝについ老人の言葉に従つて葉巻を燻らせて見た。ところがその味もよし、刺戟もないところから、そのまゝずる／＼と葉巻党となつて了つた。これが今日まで続いてゐるのである。

こんなことから、葉巻の方もだん／＼進んで、独逸の二ヶ年半は一日平均して六、七本宛の葉巻を喫んだものである。そうして今度は反対に、時々老主人に葉巻を頒けてやった。老主人は「ダシケ・シェーン」と喜んで手を出した。そしてこの時は例外として、その煙草を喫んだ。

私が独逸人の透徹した節約振りと、規則正しい生活に対して、驚異の念を抱いたのは、この時からである。

私はその後帰朝して、一番困ったことはこの葉巻煙草であった。私は有体に言ふと、留学中に相当の借金さへ出来たので、帰朝してから悠々葉巻をふかしてゐるやうな余裕のある筈はなかったのであった。当時一番安い葉巻は、ロンドレスと言つて、一本五錢であった。この葉巻は今はいは四倍の二十錢となつてゐる。然し経済上止むを得ないので、この五錢の葉巻で我慢するより外はなかつたのである。我慢はしたものの、その不味さ加減は実にお話にならなかつた。

独逸で私の喫んでゐたのは、五錢だと相当上等のものであり、又外国に居れば、経済上にも融通がつくので煙草代は別に財布に響くやうなことはなかつたのである。こんな訳で私は一時禁煙を決心して、約一ヶ月間続いた。然しどうにも辛棒が出来なくなつて、又喫煙に戻つた。その時はもうロンドレスの安煙草で我慢が出来るやうに習慣づけられたのである。

それからの喫煙生活は、平凡に続いた。時には思はぬ飛入りの上等な葉巻が手に入って、生活記録を豊かにして呉れた。

その一つの大きい収獲は、大正十一年のことである。時の横浜税関長から税関の葉巻標本となつてゐる数十種その数三四百本を手続きの上で払下げて貰つた。この中には珍らしい種類のものもあつたが、概して品質は中以下のものに属してゐた。

私はこのうちで二百本だけを瓶詰めとして、保存しその残りを次ぎ／＼に喫んで行つた。そうしてこの瓶詰め葉巻は、私が死んだ時棺の中へ入れて貰ふやうに、遺言をして置くことにした。私は三途の河原を悠々と漫步しながら、紫煙をふかせ、先輩の伊藤公や野田大塊翁などと煙草の話をしながら、新着の葉巻を一本宛分け与へるであらう場面を想像して、甚だ愉快に感ぜられたのであつた。

ところが間もなく襲つた彼の大震災に出會つて、私の心境にも又現実にも非常な変化が起つた。と言ふのは私はこの日、いつもの日程通りであれば、その時刻は横浜銀行集会所に行つてゐる筈であり、そこへ行つて居ればあの無惨な倒壊家屋の犠牲となつたことは明かである。

全く幸運にも私は、学校で時間を思はず過してゐる時突如起つた大震災に微傷だに負はずして、屋外に遁れ去り、その上私の住宅も大なる損害を蒙らずして残つたのである。

この時以来運命は、私に一つの暗示を与へた。そしてもう私はこの世のものではない。一度死んだものである。これから先きの生命は余分なものである。この余分の生命は働けるだけ働いて、国の為に捧げよう。と固く決意したのである。

死んで喫む筈であった二百本の貯蔵葉巻も、棺に入れる必要がなくなつた。死んだつもりで喫んで了はう、その代り死んだつもりで働かうと、必死の努力で東奔西走した。自分ながらよく働いたものだと思ふ位、働きながら、葉巻を唯一の伴侶とし慰藉者として、愉快に働いたのである。この葉巻はその年の十月十八日で尽きた。つまり五十日間、二百本を喫み切つて了つたのである。

この煙草が尽きた時に、私は考へた。この復興の大業が始まつてゐる最中に、自分が葉巻をふかすのは如何にも心苦しい。一層のこと禁煙しようと思ひ、断行を続けた。ところが翌年三月下旬に学校の入学考査が始まつた。その機会に身体検査場で体重を量つて見ると、驚いたことには……僅か五尺の短軀である私が、二十貫を超えてゐて、この半年に一貫五百匁を増加したのであつた。

傍に居た教務主任で生理学造詣の深い故横地君がこれを見て、この上の肥満は危険である。禁煙の結果の肥満であるから、これは早速又喫煙を始めるがよいと忠言して呉れた。私は背に腹は代へられず涙を呑んでその忠言に服したと言ひたいところであるが、実のところは渡りに舟と喜んで又もとの愛煙党となつた。

それから再び喫煙生活は続いて、浜口内閣に至つた。この内閣は消費節約を標榜し、突然煙草の値上げをした。これは私をして少なからず憤りを感じしめた。そうして私は自ら深く期してこ

の内閣の存続する限り断乎禁煙することを声明した。

私の憤慨は実にこの内閣の機構に対する不平であった。即ちこの煙草の値上げは、愛煙家にとっては、税の値上げに優る大きい影響を与へるものである。税の引上げは議会の協賛がなくては実行が出来ないところである。然るに煙草は一官吏の意志で自由に値上げが出来る。然かもその及ぼす影響が税以上でありとすれば、こんな矛盾はどこから来るかと言ふと、畢竟それは政府の機構の不合理であり、運用の不真面目であると言はねばならぬ。

こんな内閣の値上げを甘受することは最も潔しとしないところであり、その対案としては、禁煙が最も良法であることを信じ、又それを実行し続けたのである。

私は昨年十二月下旬に、軽微な風邪に侵され、二三日病臥したが直ぐ起き出して外出した。ところが咳が可成りひどく出て、仲々止まらない。そのうち一月の中旬頃から下痢が加はって、それが三月の上旬まで、約五十日間に亘って連続した。その結果体重は二貫目以上を減じ、十五貫四百匁とかつてない低率を示した。これを肥満時代に較べると実に五貫目を減じた訳である。

医師に診断を求めたが、別に大した手当法の必要もないやうな話であったので、特別な養生もせず、咳をしながら、下痢を続けながら、所用のまゝに東京へも度々出て行った。

ところが三月十二日に、診断を受けた医師から、重大な宣告を受けた。この容体はもう肺炎か肋膜炎の一手前まで進んでゐる。絶対安静の必要があると厳命を受けた。そこで仕方なく命ぜら

れるまゝに三週間、全く床上の人となり、身動きさへ出来ぬ始末であった。然し床中にありながら、煙草の方は相変らずふかしてゐた。

喫むには喫んだが、殆んど煙草の味はしなかった。ただ喫んでみると、何んだか気の済むやうな気がしたのである。だが喫み過ぎると脈搏が昂まるやうな気持ちがあるので、勢ひ節煙するこゝに努めた。

病勢の激しい時は、数日の間一本も口にしないこともあった。然し全く煙草から離脱することは出来ないで、頭の中で色々と煙草の妄想を画いて見た。

その第一に考へたことは、一体喫煙は罪悪かどうか、と言ふことであつた。世界の国々には、禁酒の国はある。曾てはアメリカは、全国に禁酒令を布いたことがあり、今でも洲によっては依然禁酒を實行してゐる。

ところが世界のどの国を探して見ても、禁煙国と言ふものは一つとして存在してゐない。して見ると喫煙はいゝことではないとしても、罪悪ではない。又よし罪悪と算へる者があつても、酒の罪悪とは比較にならぬ軽度のものだと言ふことも出来るのではあまいか。

可愛いゝ娘を嫁にやる場合、相手の婿が酒を呑むかと言ふことは調べられるが、煙草を喫むかと言ふことは、余り調べられもしないことであり、又よし調べられて、その事実があつたとしても、さう大して重大な結果を与へるものとは考へられない。

又月に一度の興亜奉公日に当っては、酒を呑むな、煙草を喫むなど、これは同罪に扱はれてゐるやうである。

こんな事を綜合して考へると、煙草は一つの罪惡のやうでもあり、又そうではないやうでもある。更にこれを事実問題として考へると、酒に酔払って乱暴を働くことはあるが、煙草に酔って乱暴をしたと言ふ話は聴かない。して見ると同じ酔ふにしても、煙草は酒に比べて微罪放免と言ふところかも知れないのである。

尤も厳格な規準を以て、道義を律するキリスト教信者とか、矯風会のお歴々の前では、煙草も全く頭の上らぬ同罪であることゝ思はれる。

私自身の考を有体に言ふと、煙草も決して良風であるとは言へないと考へる。私が震災直後に断行した禁煙の理由も、道義的觀念から出發したものであったことは偽らざる事實である。

抑も喫煙の起原はと言ふと、欧亜に亘る所謂旧世界でも、四百年前までは、喫煙の風習は、全くなかつたものである。然るにコロンブスがアメリカ大陸を發見して、未知の人類文化を色々發見したうちで、彼がアメリカインディアンから教へられた煙草こそは、その最大の賜であつたと礼讃するに躊躇しないのである。

彼コロンブスがこの煙草を發見して以来、世界の人類が、如何に幸福に、その生活の内容を豊富にし得たことか、これは間違ひのない推論であると考へる。

ただ世界人類の総てが、愛煙家ではないが、如何なる人でも茶と煙草と酒の三つの一つをたしなまぬ者はない筈である。であるから正確に言へば、人類を三分して、その三分の一は煙草党であり、愛煙家であると言ふことは、決して過言ではないと考へる。

つまり世界人類の三分の一は、煙草の存在によつて、日々の生活を享樂し、人生を樂しんでゐることを考へる、とその功德も亦実に偉大なものと言はなければならぬ。

煙草！

(二五・五)

## その二

煙草はなくとも、人間は生活が出来るではないかと言ふ者もある。して見れば煙草は人生には無用のものではないか。と言ふ議論も一応は成り立つ理窟である。

然しこの理窟は一部ではあるが、全部ではない。例へば家を建てるにしても、直接必要な室だけ建てればよいかと言ふに、決してそうではない。矢張り一見不必要なやうな、門もなければいけないし、庭園もなければならぬのである。

又都市を建設するにしてもそうである。建物と街路があればそれでよいと言ふものではない。

公園も必要であるし、街路樹も必要である。公園のやうなものは、今の時世に贅沢であるから掘返して馬鈴薯でも作れと言ふ議論も出ないとも限らない。

然しこれは非常時中の非常時の場合のみに言はれ得るところであつて、国も個人も如何なる場

合にあって、余力を残して置くことが必要である。人生の余力を生ずる方法には、色々のことが考へられ得るのであるが、最も手近かで、簡易な方法とは言へば先づ煙草を楽しむがよいと考へる。喫煙によって与へられる人生の余裕と言ふものは決して馬鹿に出来ないものである。

然しその余裕、その価値がどの程度のものであるかは別問題としても、私は喫煙による独自の瞑想境の生れることのみでも、こんな有難い境地を味ふ方法は、煙草以外にそうあるとは考へられないのである。

異国の空の一人旅、晚餐の後にホテルのサルーンに出て、安楽椅子に身を托しながら、静かに紫煙を立てつゝ、同じ宿に集った各国各種の人々の思ひ／＼に話し合ふ有様や漫歩の姿を眺めたり、遠く思ひを故国に馳せて居るうちに、明日の日程のことも、今日過ぎて来た跡さへ忘れ、果ては自分の現実の存在さへ、此一本の葉巻の煙の如く立ち消えそうになつて行くであらう、その時の心境こそは、実に何んとも言へぬ旅の情趣の泌み出る時である。

旅をする人の仕方は色々である。細かい旅の日程を作つて、朝から晩まで、足を棒にして名所旧跡を親の仇でも討つやうに探し歩く人もある。その日に観たこと聴いたことは、ペンの続く限り細大洩さず手帖に書き込む人もある。又蒐集癖の人々は、出喰はした総てのものを記念として、トランクに詰め込むのである。やつと宿に入ると、先づその日の収穫の勘定に忙がしい。今日の見物は能率がどうであつたか、明日は今日の失敗を取返へさうとか、又もつと能率をよくし

たいとか、只管身体を勞し心を勞して、余裕のない張りつめた旅行をする人々がある。

私の旅の仕方は、一切の窮屈な日程や、能率主義は避けて、悠々紫煙に踏晦することである。どちらがよいか悪いか、それを論ずることが既に旅の本意ではないのである。私は私の方法により、他の人々は十人十色として、それを尊重するの外はないのである。

独房浄机の前に、端座しなくとも安楽椅子でも、ソファーでも、或は寝ころんで、一本の葉巻に火を点じ、立昇る紫煙の行方を眺めながら、無念無想に入るときに、邪念、雑念が霧の如く消散して、忽然として現れる真の姿を認めることが出来ることがある。

日頃念じながら、又思を凝しながら、どうしても解決することの出来なかつた問題が、訳もなくその解決と打開の途を見出し得ることがある。禪の悟入と言ふか仏道の悟りに似たものが自然に生れるのである。

この環境を捉へ得ることが、即ち哲学者の哲学となり、教育家の教育となり、政治家の政治となり得るのであらうと考へる。彼の伊藤公の縦横無尽の国策も、野田大塊翁の大道無門の出入もこの葉巻の功德でなかつたと、誰が言ひ切り得るであらう。人間が山海の珍味を鱗腹詰め込んで、葡萄の美酒を夜光の杯で呑むだけ呑んだ後に、香りの高いハバナを一本口にすることは、蓋し愉悅の極致と言ふべきであらう。

然しながら喫煙の真の姿を求めず、又喫煙の必然性である余裕を求めず、徒らに時をも所をも

嫌ひなく、無意味に喫煙することは、正に煙草道の邪道であり、邪喫であると考へる。そこに道徳觀念が生ずるのではないか。邪喫は衛生上から見ても害毒であり、經濟上からも不經濟である。と言ふ色々な問題が起つて来るのである。この邪道に入った人々は、自らその弊害に懲りて、屢々禁煙を断行するのである。

この種の人とはたとへ一度は禁煙しても又何かの機會で又元の愛煙家となり、又禁煙家となり、又愛煙家となり、常にこの二道の間を彷徨してゐるのが通例である。これはその人に道徳觀念がなく、意志薄弱であることが原因をなしてゐる。更に大乗的に言へば煙草に淫してゐるからであると考へる。

私は世の愛煙家には須らく道徳觀を持たせたいと思ふのである。又園芸趣味とか釣の趣味とかと言つた、高尚なる一つの趣味としての煙草を存在させたいと念するのである。それには先づ邪喫の習慣を廃めることである。そうして思索の益友として、又冥想の好伴侶として煙草を生かして行くことである。

喫煙の悪弊から開放されたならば、花卉蔬菜の栽培や、或は釣糸を垂れて魚を待つ心境と同じ淨樂を味ひ得ることゝ考へる。何故にこの煙草と言ふ、天の与へた、人類への美祿が初めから文化的人類に与へられないで、アメリカインディヤンに与へられたか。これは中々興味の深い問題である。

私が学校を創立して、二年目であったと記憶する。一日一教授が気色ばみながら、私に告げたのである。それは学生達が授業休みの十分間に、教室内で喫煙して、その煙が濛々として室内に立ち籠ってゐて実に不愉快であり、あれでは到底授業が出来ない。何んとかしなくてはならないと言ふことであつた。

この教授の申出には、一理も二理もあつたし、又教育の立場から厳格に言へば直ちに矯正取締まるべきであつたのである。然し私は自分の場合から推測して、それほど学生が楽しんで喫つてゐる煙草を強制的に取り上げて了ふことは、何んとしても出来なかつた。

いや学生以上に煙草の好きな私が、学生の煙草に禁令を出すと言ふことは、寧ろ滑稽染みたことにも考へられたのである。そこで私は一つの妥協案を考へついたのである。

今後私は校門を一步這入れば、煙草は絶対に口にしないことを約束する。その代り学生達も教室内では煙草を喫まぬやうにして貰ひたいと言ふことである。私はこの約束をその時以来退任するまで正直に恪守し得たことを、今日でも誇負してゐるところである。

私は斯く決心し、斯く約束はしたものの、当初は禁煙の校内生活は実に堪へられぬ苦痛であり一日の長いことを熟々味はされたのであつた。当時はまだ校用の自動車はなかつたので、私は外出に電車を利用してゐたのであつたが、校門を出ると、直ぐ煙草に火をつけて口にした。

終点から電車に乗つたのでは、煙草はそのまゝ喫ひ続けることが出来ないので、態々電車に乗

らないで、煙草を喫みながら電車道を悠々と次の停留所、若くはその次の停留所まで歩くのが習慣であった。

思へばこれも、過ぎた二十年の昔である。昔思へば懐かしいものである。この二十年の間には総ての物が変遷した。私自身も、私の周囲も変化した。その中でいつも昔と変らないものは私と煙草である。

煙草と私は長い親交である。長い間のことであるから、その間、時に色々の経緯もあったのであるが、この交友許りは過去現在未来を通じて、最も変りなき交渉を続けて行くものと考へる。

(一五・六)

### その三

他家を訪問した場合、その応接間の卓上に、灰皿やマッチなどの煙草道具のない時ほど、寂莫を感ずるものはないのである。私はそんな場合の印象は、どうもこの家の主人夫妻は、厳格なクリスチャンでもあらうか、或は又矯風会の役員でもあるのではないかなどと想像するのである。

これとは反対に、待つ応接間へその家の主人が、葉巻を燻しながら現れて来るやうな場合は、例へそれが初対面であらうとも、百年の知己の感がして、何か物を頼みに行っても、話をせぬ先から、こちらの希望はもう半分は聴いて貰へたやうな気持ちになるのである。就中主人がマドロ

スパイプを口にしながら話をされるやうな時は、一層親しみを覚えるものである。この点から言ふと、パットか朝日などを喫はれるのでは、線が少し細過ぎる為か、その受ける印象は、それほど強くないのも面白い対照である。

煙草に親しむ人は、どうしても親しみが湧き易いのが人情である。相当生活に余裕のある人も質素な又簡単な生活をして、酒にも煙草にも親しまぬと言ふ種類の人は、どうしたものか、どことなく変人らしいところか、世捨人のやうな感じがしてならないし、又そんな人にはどことなく和やかさが欠けて、凄味が加へられてゐるものである。若しこの人が上層社会の人であり、支配階級の人であればあるほど、この感じが強いものである。

然しこれを、伊藤公や野田翁の場合に、あてはめて見ると、二人とも人から憎しみを受けたり、恐れられたりするやうな、暗い影はどこにも見出し得ないのである。ただ伊藤公の兇手に斃れたのは、その下手人が異人種であったのと、その動機が全く個人の性格を除外した政治的の關係であつたからである。

更に他の一例を引用するならば若槻男がある。男は有名な酒豪であり、愛煙家である。若し男をして、適材適所を得せしむるならば一樽の孤被りの前に座せしめ、酒杯とマドロスパイプを男の手に握らしむることである。あれほど問題となつた倫敦条約の責任者ではあるが、何の不祥事も生まなかつたのは、この男の風格が、最も大きい素因ではあるまいかと思ふのである。

これから見ると浜口氏や井上氏は、個人として実に立派な人々でありながら、共に非業の死を遂げるに至ったのは、この二人には酒杯もマドロスパイプもどうも似合はないと言ふことが、可成り重大な関聯を持ったのではないかと考へるのである。

朗らかさ、和やかさ、親しみと言つたものは、人生の華であると思へる。この華の咲かない人は、どこかに寂しさがあり、近づき難いものである。こんなことが個人的には最も大きい好悪感となつて現れるものであると考へる。斯かる人生の岐れ目は矢張り喫煙を持つか持たぬかに基礎付けられることも少くないと考へる。斯く考へて来ると、喫煙は立派な道徳であると、言ひ切る事が出来るのである。

十年ほど前の話であるが、私は所用の為に帝国ホテルに、数日間続いて出入してゐたことがある。その時昼食時には、食堂の或一定したテーブルに着く習慣であつたので、自然そのテーブルを持つてゐたボーイと懇意となつた。

私が食後に必ず葉巻を取出して、喫ふのを見てゐたそのボーイは、話題を煙草にとつて、私と色々話合つたのであつたが、その時ボーイは、自分は葉巻煙草についてゐるバンドを蒐集することに非常な趣味を持つてゐることを告げて、その蒐集品を一度見て戴きたいとのことであつた。

私はこの変つたボーイさんの趣味に少なからず興味を覚え、その蒐集帖を見ることを楽しみにして待つてゐた。聽て大きいアルバムが私の手に渡された。長い年月に亘つて根気よく蒐められた

ものであるだけに、あらゆる種類のバンドが手際よく貼り付けられてあった。今までは無心に切つて、そのまま灰皿の中へ打ち棄てゝしまった、あのバンドがこんな立派な趣味的価値を持つものだと、始めて知った新しい分野であった。

私はただ驚嘆と羨望の眼を見張つたのであった。ボーイさんはその蒐集の秘訣を語つて、ホテルの食堂又は喫煙室で、外人が喫煙した後の掃除の時に集めるのであるが、一番書入れの時は、観光団が大勢入り込んだ時で変つた種類が最もよく手に入ると言ふことであつた。

私はこの時以来、葉巻煙草のバンド蒐集に興味を持ち、又私の仕事として適當したことだと考へたので、機会ある毎にバンドを貯めて置いた。

ただ何よりも残念に思ふことは、震災後に横浜税関から譲り受けた煙草に就ては、その全部のバンドを逸して了つた事である。然しその後気をつけて蒐集したものが、百種に余るものがあり大分蒐めたつもりであるが、これを帝国ホテルのボーイさんの蒐集に比すれば、微々として言ふに足らぬのである。

私が大分蒐めた頃のことである。ホテルニューグランド社長野村洋三氏夫人美智子女史が、貴下は葉巻のバンドを蒐集なさつていらつしやるそうであるが、成るべく沢山戴きたいと言ふことであつた。私は、集まつてゐるだけを贈つたのであるが、その後時が経つて、夫人から一脚の飾卓子が贈り届けられた。

その卓子は玄関に置くに適當なものであったが、卓子の上には硝子が張られ、その下には私の蒐めたバンドを、美術的に組合せた、趣味豊かな芸術品であった。

猶よく見ると、そのバンドの配置は、種類を分け模様を分け、形を分けて、それ等を巧みに配置した分類的綜合的の美しさを合せ表現してあったのに、一層驚かされたのである。無心に捨てゝ了ふべきバンドを蒐集することを教へられ、更にこれを実用化し、芸術品化することを教へられて、私は物の利用価値の効果と人の注意力の効果に就て少なからず、実物教訓を得た次第である。

この記念すべき卓子は、今も猶私の家の玄関に置かれてあり、十数年を経てゐるが、そのバンドの色彩に少しの変色もなく、昔のまゝの姿である。私は野村夫人に深い感謝を表し、又帝国ホテルのボーイさんにも厚く御礼を言ひたいのである。恐らく私と煙草の因縁を物語る記念品として、永劫に伝へられるであらうことを私は信ずるものである。

(一五・七)

## 父母の思出

横浜高工時報 六ツ川夜話（昭和十五年九月）より

私は男児四人の長子として生れ、専ら父母の愛撫を受け、農家に育ちながら一切の勤勞に孝養を欠き、十五歳にして早く既に家郷を去り諸國に流寓し、意の儘に行動し來つたが、爾來六十年に近き歲月が過ぎ去つた。

父母が亡くなつてから、此又三十年に近くなるが、今でも時々幼時のことが憶ばれる。

◇……◇

私の生れ故郷は瀬戸内海に臨んだ愛媛県の東の端に位する僻地である。新体制の昨今まで旧正月を墨守して居つた農家にとっては、旧正月と云へば、秋収冬藏の後で一年中の最も閑散な季節である。随つて子供までもお正月を迎へることは何と云ふことなしに楽しき思ひでゝあつたことは、古稀を超へた今日でも忘れ難いものがある。

◇……◇

健康で平素朝早く起きる習慣の父は、元日の朝はまだ夜も明けない寒い星空の天を頂いて私を

連れ出し、二ヶ所の神社に参詣するのであった。往復で一里内外の行程であるが途中で人に出合ふこともなく、淋しい冬枯れの暗い野道を親子二人で、殆んど無言で、十歳前後の私は寧ろ眠たさをこらへて、トボ／＼と父の後を追って歩むのである。

東の空に明るい大きな星が出て来ると、父はあれは夜明けの明星であると説明してくれる。家に帰り着く頃漸く東の空が白くなり始めるのであった。

◇……◇

大正四年の十一月東蒙古の天然曹達探險の爲め約三週間程、鄭家屯から洮南附近に旅行した。今日は四平街から鄭家屯を経て洮南から、北は黒河まで鉄道が通じて居るが、其当時は新京から大連までの、一本の満鉄線のみであった。

平砂万里人煙を絶つ枯野原を、馬が十七頭、馬車が五輛、苦力を合せて十人の一群が、毎日毎日参謀本部の見取地図を便りとして、天然曹達の露出地と思はれる方向へと、馬ではあるが牛歩を進めた。

◇……◇

北支や蒙古の旅の習慣として、朝の出立は非常に早いのである。時には午前前三時に出立することもあった。其代りに適当な宿所が見当たると午後の二時頃になると行進を中止した。黄昏の頃遙か遠方に、非常なる速度で野火の燃え拡がる、所謂燎原の火は、一種の物凄い氣に打たれる。

日中時とすると千を以て数へる黄羊の大群が、一塊となつて、はてしもない荒原を移動して居る。全く人間社会と隔絶した天涯万里と云ふ異域の感がせられる。

◇……◇

蒙古の夜の空は特に澄み渡つて居る。星の光りは燦爛として、月のないのに月夜の感がある。暁近い頃には零下五六度の寒さが身に迫る。時とすると行く手に狼の群が現れると、一番先に覺るのは馬である。忽ち馬が立往生をすると、我々も無言の儘で狼が去り、馬が静かに動き出すのを待つのである。

東の空を眺めると夜明けの明星は、小さな月の様に燦として輝き、中天を指して、急いで上つて行くのが見受けられる。忽然として雲辺山上を駆け上る、故郷の元日の暁の明星を思ひ出した。忽ちにして亡き父と私の幼時が、ありありと脳底に去来する、止め難い熱い涙が頬を伝つて流れ落ち脈々たる一種の靈氣と共に元旦の父の姿が、眼前に浮び出る。私の一生を通じて此時ほど父懐しいと云ふ、感に打たれたことがなかった。

◇……◇

明治十年前後はまだ交通機関の幼稚な時代で、数十里の道も、容易ならぬ旅路であつた。僻陬の故郷の父老が一生一度の伊勢参宮は恵まれたるあの世までの土産物であつたに相違ない。

私の母も幾人かの村の同行に加つて、此の楽しい参宮旅行から帰つて来た。六歳か七歳であつ

た私は、村はづれまで迎へに出て、暫く離れてゐた母が、陽にやけて、全く別人の様になつた旅姿を見た。驚きもしたが、又飛びつく様に嬉しかった。其から幾日かの間は母の側を離れず、奈良の猿沢の池や、二見の夫婦岩の話や、数々の土産話に子供心を満足せしめた。

◇……◇

昭和十年の二月、私は四十年に近い教壇を退き、全く野人となつた。行雲流水久しい間の官場の塵を拭ひ去らんとて、其夏五人の家族を連れて、悠々自適の旅へと出で立つた。

伊勢の大廟を参拝して其夜は二見の浦に一泊した。二見の浦は私には初めてであつた。翌朝旅舎を立ち出て、急がぬ旅のことゝて、悠々と海岸伝ひに歩を進めた。忽ち静かな浪間に、二見の夫婦岩が眼前にあらわれた。其瞬間実に電光石火の様に、亡き母が思ひ出された。何と云ふ感激であらう。あの陽にやけた旅姿でその昔母も今私が立つて居る同じ場所から、夫婦岩を眺めたのであつたかと思ふと、自分の齢も、経歴も、野人も忘れて、六ツや七ツの幼な気分が、全身に湧き返り、あの陽にやけた、母の旅姿の外は何物もなく、只目に見えぬ母に二見の浦で再会した懐かしき、又はかない無量の感慨に、せき止め難い涙を、側に居る家族から、隠すのに一生懸命であつた。

◇……◇

早く父母の膝下を離れ、他国に流寓した、私には、無論風樹の嘆があるが、其れは致方がな

い。併し万里の空原、万里の情に浸って居る蒙古や、四十年に近い官海を去って、烟波に身を托す孤独野人の旅路で亡き父や母の思出は又特殊のものである。愛撫せられて、懐しい思出多い、父母を持ったことは私の終生の幸福であることを切に感ずる。

(八月二十九日)

## 別れの言葉

入愚亭独嘯(昭和十七年八月十五日発行)より

私は多年この講壇で諸君にお目に掛って参りました。が今日は本校々長として諸君に訣別の言葉を申し上げねばなりません。然して諸君が斯く多数御集り下さったことは、私の洵に光栄とするところでありまして、衷心より謝意を表する次第であります。

人間がこの世に生れ来ました以上は必然的に何時かは死なねばなりません。同じやうに一度職に就いた者は必ず何時かはその職を辞せねばなりません。然して死は天命でありその死期を定める事は出来ません。いくら五十歳まで生きて居たいと念願してもその願は容れられないかも知れません。況んや百歳までの寿命は望んで得られるものではありません。翻って辞職の場合はどうかと言ひますと、その原因が他動的に存在しない以上は、各人の自由意志で決することが出来る

のであります。そこで人間の出所進退と言ふことが甚だ意義深いものとなりますのであります。その同じ進退をするにしてもその時期の如何が問題となるのであります。死は人生の歳末総決算であるとしませれば其進退は人生の半期決算でなければなりません。特に公人としての場合にその重要性を認めねばなりません。

私の今回とりました辞職の形式と時期に就いては、叙上の意味で充分熟慮の結果最善の方法と確信して断行を敢てしたものであります。遡って本校創立の当初に於いて私は十年間無事に其任務を果し得たなれば、潔く後進に道を譲るべきであると考へたのであります。然しその後十年経って見まするとまだなすべきところをなし、果すべきところを果してゐない未練さと執着の迷ひが出て参りました。そこで当時兼務した県立商工実習学校々長の職を辞したに止まり、更に五年の間本校々長としての職を継続したのであります。

然るに今や満十五年となりました。この長い年月の間私は実に幸運にも何等の支障を受くることなく一路坦々今日あるを得たのであります。私は二六時中等かの異変があり、責任をとるべき必要のある場合を予想しまして精神的には肌身を離さず辞表を抱いてゐたのであります。が然し大過なく去一月十九日を以て満十五年に該当するに至りました。私はこの日の来るを只管待つてゐたのであります。そこでその日の十八日にはこの講堂で校長として最後の講演を致したのであります。その時に私は特に明日は創立満十五年に当ると言ふことを申上げたのであります。

す。無心に聴かれた諸君には別に何等の意味にとれなかったかも知れませんが、私としては実に感慨深いものがあつたのであります。と申しますのは既にその時は私は辞表を懐中してゐたのであります。

その翌十九日に文部省へ辞表を提出しました。一体官吏が辞表を出す場合には、病気で其任に堪へないからと言ふことを理由にするのが普通の形式となつてゐます。それは官吏は自分の勝手に職を辞することが出来ないと言ふ建前からであります。然し私の場合は些か趣を異にしてゐます。私は従前の形式に拘泥することなく自分の心境を最も卒直に書き表したのであります。

即ち

私儀本年ヲ以テ頽齡六十五歳ノ春ヲ迎へ、且当一月十九日ヲ以テ本校創立滿十五ヶ年ニ相達シ申候ニ付キ、此機会ヲ以テ退職仕度此段御願申上候也

と言ふ文面でありました。

ところが文部省では事が突然であり且私の辞職を惜まれ慰留の言葉がありました。私は自ら決意したことであり、その聴許を求めました。又辞表の文面も異例ではありますが、反つてそのまゝ受理せられることゝなりました。この場合私は文部省当局の方々が私の心境をよく掬んで下さつた御好意に対して厚く謝意を表してゐるものであります。そうしてこの辞表は当局へほんの暫しの間お預りを願ひたい。それは自分だけ学校を去ればよいと言つた訳には行かないので、跡

始末の工作をしなければならぬからと言って、これも聴き届けられたのであります。

そうして帰校後私は数氏の教授の方々に、辞表提出の次第と校内の人事行政特に経綸上の行詰りを述べ、その打開を策し、且更始一新を期すべく勇退した心境を述べて、共々にこの際行動を一つにして戴きたいと苦衷を披瀝したのであります。その時昨日勅選待遇となり、同時に依願免官となりました三教授は、全く私に同意せられたのであります。私はこの三教授の私心を捨てた義理人情と友愛の深いこと、並にその態度の立派な点に対しまして、心から感謝するものであります。

尚この外に二名の教授の方が私と行動を共にすることとなり辞表をお出しになってゐます。然しこの方々はもう少し御尽力を願ふことが残つてゐますので私が或時期までお願いすることゝなつてゐます。更にこの外に両三氏が進んで私と進退を共にしたいと言ふことで辞表を御提出になつてゐます。その真情洵に有難く感謝致してゐます。十五年の長き間微動すら起らざる太平円満なる校務を遂行致しました上に、その退職に当りまして斯くの如き数々の美しい人情味を与へられたことは、この上なき私への饒けであり有難くお受け致す次第でございます。又同時にこれは我横浜高工の誇るべき美風の現れであると信じます。然しこれ等自覚的の辞表提出の方々には、私から極力慰留を致したいと思ひます。

私は今この学校を去るに當つて決して他意はありません。世の中には多少のデマを飛ばすもの

もありません。或は私が事業界へ出るであらうと言ふのです。然し同じ働くならば私は寧ろこの学校に留つて猶三五年働くであります。又他の方面で教育に従事するであらうと言ふ噂も矢張り同様であります。其他の色々な噂も要するに臆測であるに過ぎないのであります。勿論私はこれから当分の間隠居をする考であります、然し私はまだ耄碌したとは考へてゐないのであります。国民の一員として為すべき事は為し得ると考へてゐるのであります。

辞表を当局に差出しました時に三月の卒業式後に発表してはどうかとのお話でありましたが、一月から三月まで辞表を保留して卒業証書も私の名で渡し得ると言ふことは洵に有難いお志であり、これは教育者としての本懐であるのであります。又翻つて考へますと一旦辞表を出した以上は何処まで完全にその秘密が保たれるか、これは人間の仕事である以上、絶対的の保証は致し兼ねるのであります。若しその秘密が洩れたとなると必ず色々な面倒な事がそこに起るに違ひない。これは矢張り速決がよいと言ふやうに考へられましたので、左様に処置をして戴いた次第であります。

私は爰に辞任しました。さてその次に来る問題は当然後任の問題であります。私は昨日新たに任命せられました富山保博士を推薦致したのであります。私は後任として同博士を推薦致しましたところ、当局に於いては何等の異議なく決定を見たのであります。富山先生に就ては諸君も御承知であらうと思ひますが、本校が大正九年創立当時から講師として御関係になり、一方当時東

神奈川に在りました横浜舎密研究所の主任として、其経営に当られました。舎密研究所と言ふのは化学工学の研究をなすのを目的として、原三溪先生並に中村房次郎氏の共同出資になつたものであります。然るにその後主任の富山先生に対し、東北帝大は小川正孝総長の辞任後の後継者として、同大学から就任承諾方の交渉がありました。これは私に対しても再三照会があり、富山先生に対して直接の交渉もありました。

遂には小川総長自身が横浜まで出馬され、或は只今大阪帝大の理學部長真島利行博士や東京帝大理學部の片山正夫博士などが、交々勧誘に努められたのであります。然し富山先生はこの立身出世と學界御歴々の熱願をさへ、振り切つて了つたのであります。富山先生の当時の心境を忖度致しますと、それは自分は今この研究所の中心である、若し自分が自分の利益の為にこれを打棄てたならばそのあとはどうなるであらうか、又化学工業の為に私財を惜しまなかつた篤志の人々に対しては何と申訳が出来ようか、斯く考へられて将来を約束せられて東北帝大総長の栄位を捨てゝも、一小研究所を護らうと決意せられたのでありませう。

私が書き残して置いた「自由教育の片鱗」なる小著の中に名節に関する所見を述べて、『責任を重んずる人、名節を尚ぶ人、彼は頼もしき人、彼は苦節を共にするに足る人と我も許し人も許す人格者』と言ふ一齣がありますが、これは暗に富山新校長の人格を言つたものであります。この舎密研究所は昭和四年頃まで続いて解散となりました。その後も富山新校長に対しては或は三

井から或は住友から招聘を受けられたのでありますが、初一念を通されて横浜の孤城を守られたのであります。最近に於ても日本揮発油会社と言ふ大会社の重役となりました。これはこの一月中旬のことであります。その最初の重役会議が昨日東京で開かれ、富山新校長も列席せられたのであります。その日偶然発令があつた次第であります。富山新校長は私から突然の交渉であり其進退については色々御事情のあつたことと思ひます。

それはこの会社の外に他の会社にも御関係があり、その方も校長就任と同時にやめられねばならぬと言ふ事情にもあり、其去就は到底簡単に決することの出来ないのは、私も万々承知でありましたし、富山新校長も其任にあらざる旨を以て、再三再四固辞せられたのであります。然し遂に其総てを抛つて御承諾下さつたのであります。

私が辞表を提出して以来今日まで二旬以上を経過してゐますが、この間校内の職員間にも又学生諸君にも些かも感知せらるゝことなく過して参りまして、その間予定の工作を疾風の如く断行し得たのであります。即ち昔の兵法が教へる疾きこと風の如しの一句を実行したのであります。諸君は私のこの心事を御賢察願つて、私のとつた行動の全部をどうか無条件で御賛成願ひたい。そうして御支持願ひたいのであります。そうしてその全校の態度を静かなること林の如しと言ふ対句によって処置して戴きたいのであります。

疾きこと風の如しと言ふ句は私が実行しました。従つてその後句である静かなること林の如し

の一句は諸君によって実行して戴きたい。これが私の願であります。昔支那で宋に蘇老泉と言ふ文豪がありました。この文豪は又一面に於て仲々鋭い論客でありました。彼は管仲論と言ふ論文を書いてゐます。この管仲論は今日でも仲々愛読者が絶えません。この論文の中に彼は言つてゐます。管仲は斉の威公に宰相として政治を執り、又諸侯と聯合して覇権を握り、富国強兵によつて国は隆盛に赴きました。そうして彼が死すまで治国平天下を謳歌されたのでありましたが、一度彼の死に会ふや、威公は豎刀、易牙、開方の三小人を重用した為に、斉の国は乱れ威公の死後は五公子が互に位を争つて、国に平和な時がなかつたのであります。

そこで問題となるのは管仲が死に當つて、何故其後継者を選んで威公に推薦しなかつたかと言ふことであります。ただ単に豎刀、易牙、開方の三人は小人であるから用ひられないようにと言ふだけであつたのは、管仲の用意が余りに足りないと言ふ点を、彼蘇老泉は大に責めてゐるのであります。そうしてこの論文の終りに次のやうな文句が書かれてゐます。

吾觀るに、史歙は、遽伯玉を進めて弥子瑕を退くる能はざるを以ての故に身後の諫あり、蕭何は且に死せんとし、曹參を挙げて以て自ら代る。大臣の心を用ふる、固より宜しく此の如くなるべきなり。

夫れ国は一人を以て興り、一人を以て亡ぶ。賢者は其身の死するを悲まずして、其国の衰ふるを憂ふ。故に必ず復た賢者ありて、而る後以て死すべし。彼の管仲は何を以て死するや。

蘇老泉はこういふ鋭い筆法を以て管仲を責めてゐるのであります。或は諸君の中には蘇老泉のやうな鋭い人が沢山居られるかも知れない。そうして彼校長は何を以て辞するやと私を責められるとしたならば、私は充分その責に任じることを決して辞するものではありません。

冀くば親愛なる諸君、私の辞した此の瞬間、又その後も林の如く静かに然かも歩武堂々と、我横浜高工の名譽と威力を天下に明示せられんことを熱望して歇まぬものであります。これを以て訣別の辞と致します。

(一〇・二・三三)

## 教育界の巨人 鈴木煙洲先生

——蘇峰先生の碑を尋ねて——

蘇峰会機関誌「民友」の記事より

昭和十年一月十九日、中老の一紳士が文部省を訪れ、一通の文書を提出した。係りが開いて見ると、

私儀本年ヲ以テ額齡六十五歳ノ春ヲ迎へ、且当一月十九日ヲ以テ本校創立滿十五ヶ年ニ相達シ申候ニ付キ、此機会ヲ以テ退職仕度此段御願申上候也

とあった。当時、官吏が自ら辞表を出す場合は、「病氣その任に堪えず」と書くのが普通の形式であったが、この紳士はそのころユニークな教育方針で評判高い横浜高等工業学校長鈴木達治であったから、当局は甚だ面喰って慰留に努めた。しかし鈴木は「一旦決意したから」と、飽くまで聴許を求め、後任に富山保博士を推薦して引揚げた。

やがて別れの言葉を送り、全校教職員や学生をして哀別の苦悩に泣かshめて隠棲に入った。「疾きこと風の如く、静かなること林の如し」をモットーとし、「功成り名遂げて身退くは天道なり」を實踐窮行した、日本教育界の巨人の真骨頂が此処にあった。

彼は隠棲に先立って、自邸背後の小丘に崇敬措かざる東郷元帥を祀る小祠を建てたが、その社畔に四阿を造って入愚亭と題した。その年（昭和九年）初冬、彼が「師と仰ぐ蘇峰先生」来て四阿に小憩「人間自<sup>ち</sup>有<sup>り</sup>回<sup>り</sup>天<sup>の</sup>力<sup>を</sup>、林下空<sup>しく</sup>懷<sup>く</sup>憂<sup>世</sup>心<sup>を</sup>」と、又、入愚亭の眺望を愛（め）でられ「木落<sup>ち</sup>又添<sup>ふ</sup>山一峰」の大書を揮毫されると、彼は万腔の感激と感謝を捧げ、「われ亦先生の驥尾に附せんとするもの、世は非常時局に進展するに際し、徒らに独り入愚亭に酔生夢死は許されない」と、決意を新たにした。

そして彼の夢寐にも忘れ難いのは弘陵（横浜高工）関係の壮青年であった。彼等は実にわが皇国の寧馨児である。彼等をして非凡の才能を發揮せしめ、曠古の大業を背負って立たしめ、以て聖恩に応うべく、教育者として心を虚くし、天地の自然に居り、徒らに作為せず、徐ろに人間靈

智の萌芽を守護し、これを育成せんと誓ったと自ら告白したが、その信念を以て邁進し到達したのが「名教自然」の悟了であった。

「名教」は聖人の教え、即ち孔孟の教えの如き、「自然」は人為の加わらざる、即ち老莊の教えの如きを指すが、彼は所謂「竹林七賢」の一人王戎が同じくその一人阮咸の子瞻に対し「名教自然」を訊すと、瞻は「将無同（将た同じきことなからんや）」と即答したので、戎は咨嗟して瞻に職を与えねばならなかったので、時人これを称し「三語の掾」即ち三語に拠って職にありついたという古事に由来するとも言った。

旧横浜高工と横浜工業会は、彼が隠棲すると、その標榜した三無主義（無試験、無採点、無賞罰）の独特なる自由教育の高風を永遠に伝うべく、彼の希望も汲んで「名教自然碑」を校庭に建立することにしたが、彼はその碑名揮毫を蘇峰先生に懇請したらしいが、先生から「君の学校の庭に立つ石に書くのだから、いくら悪筆でも誰れも文句をいうまい」と鼓舞されたので、自ら悪筆を揮ったと告白するが、碑背の撰は先生進んでこれを稿し、書は天下の名所三溪園で名高い三溪・原富太郎を煩している。蘇峰先生の撰文は次の通りだ。

丈夫自<sup>ら</sup>有<sup>り</sup>衝<sup>つ</sup>天<sup>の</sup>氣<sup>、</sup>不<sup>下</sup>向<sup>つて</sup>如<sup>来</sup>行<sup>く</sup> 処<sup>に</sup>行<sup>上</sup>煙<sup>洲</sup>鈴<sup>木</sup>君<sup>達</sup>治<sup>ノ</sup>如<sup>キ</sup>ハ<sup>ソ</sup>ノ<sup>人</sup>歟<sup>。</sup>君<sup>初</sup>メ<sup>京</sup>都<sup>ノ</sup>同<sup>志</sup>社<sup>ニ</sup>学<sup>ビ</sup>、更<sup>ニ</sup>東<sup>京</sup>帝<sup>国</sup>大<sup>学</sup>ニ<sup>入</sup>リ<sup>理</sup>科<sup>ヲ</sup>修<sup>ム</sup>。大<sup>正</sup>九<sup>年</sup>一<sup>月</sup>十<sup>九</sup>日、政<sup>府</sup>勅<sup>令</sup>ヲ<sup>以</sup>テ<sup>横</sup>濱

高等工業学校ヲ設立スルヤ、君即日選バレテ其ノ校長ニ任ゼラル。創立、經營ノ業、専ラ君ノ努力ニ俟ツモノ多シ。然ルニ大正十二年九月一日大震火災ノ起ルヤ、横浜最モ其厄ニ罹リ、全校ヲ挙ゲテ殆ンド焦土ニ帰セシメタリ。

此時ニ当リ、青天霹靂、命令一下、愛知県名古屋市ニ移転セシム。君慨然トシテ起チ、勇奮自カラ禁ゼズ、或ハ市ノ有力者ニ懇へ、或ハ当局者ニ抗議シ、奔走周旋寧勉スルニ違アラズ。遂ニ現場ニ於テ漸ク該校復興ノ目的ヲ達スルコトヲ得タリ。

君ハ夙ニ皇室中心主義ヲ奉ジ、躬行実践一ニ自発ノ力ニ頼ルヲ旨トシ、特ニ学生ヲシテ各自ノ人格ノ尊重スベキヲ自覚セシメ、学生ヲシテ天賦ノ才能ニ応ジテ其ノ所長ヲ發揮セシムルコトヲ教育ノ主眼トシ、而シテ自ラ三無主義ヲ標榜ス。曰ク無試験、曰ク無採点、曰ク無賞罰。君ヲ知ラザル者、皆ナ其言ヲ異トセザルハナシ。

然モ其ノ効果ハ頗ル著明ナルモノアリ、コレ職トシテ君ノ誠意ノ学生ニ感孚スルトコロタラズンバ非ズ。而シテ横浜高等工業学校ガ特殊ノ学風ヲ陶冶シ、我が教育界ニ於テ一種ノ異彩ヲ発シ、超然独歩ノ觀ヲ呈スルモノ寔ニ偶然ニアラザルナリ。

此ニ於テ、君ハ創立滿十五年ヲ期シ、自ラ選抜シタル後任者ヲ推薦シ、悠然トシテ去レリ。君ノ如キハ進退出所実ニ其道ヲ得タルモノト謂フベシ。

比(このこ)ロ、故旧門人碑ヲ校庭ニ建テ、君ノ徳ヲ頌セント欲シ、文ヲ予ニ徴ス。予君ト相

得ル浅キニ非ラズ、欣然ソノ知ル所ヲ鏘シテ以テ後ノ君子ニ諭（つ）グ。然モコレ未ダ君ノ全面ヲ罄スニ足ラザルナリ。

昭和十二年十一月一日

蘇峰・徳富猪一郎撰

原 三溪書

この碑は、旧横浜高工（南区大岡町）玄関前に白色大理石の長大なもので、昭和十二年十一月一日除幕式が挙げられたが、蘇峰先生が来場した折の感慨を、彼は「徳富先生の臨場を辱うしたのみならず、私にとって光榮至極の祝辞を賜った。先生が壇上に立たれた時には、端なくも、私が最も尊敬する新島先生が来場せられた様な感を催した」と、胸を打つように記録している。

名教自然碑は、瞻の古事に因（ちな）んで、就職に縁のある碑と称され、失職のものがこの碑に向って礼拝すると、腰弁ぐらいにはありつき、横浜高工卒業生の就職率は、この建碑以来眼に見えて上昇したと伝えられ、碑の角を欠いて懐中するものが多くあったそうだが、戦後横浜高工は、新制の横浜国立大学工学部として統合されたので、現在の碑は同市保土谷の国立大学構内に当初同様の構造で復元されている。私が初めてこの碑の見学をした折も、広大な構内で行き会う学生に「碑のあるところか？」と尋ねると「あゝ、煙洲碑ですか」と、即時道順を教えてください

た。正に不滅の金字塔であり、教育界の一大巨人は、いまでも生き続けている思いであった。因みに、彼は「煙洲」と号した。彼は愛媛の産で、四国人はもの真似が上手で「四国猿」とアダム名されるので、初め猿洲と称したが、愛煙家の彼は、音の通ずるところから煙洲に改めたという。明治四年九月生れ、昭和三十六年八月没、行年九十一であった。墓は横浜市港南区日野の日野墓地にあり、墓表は蘇峰先生が揮毫された。

追記Ⅱ本稿執筆に当り、安藤一氏のご教示に因る処多く、謹んで感謝の意を表する。

## 無試験・無賞罰の名物校長——鈴木達治——

発明協会月刊誌「発明」（昭和五十七年六月号）技術者と経営 6より

技術者の進んだ道はさまざまであるが、今回は実業界を志しながら教師となり、その特異な教育理念と学校経営の手腕により名校長とうたわれた鈴木達治の一生をとり上げよう。

大正昭和前期には全国で十数校の高等工業学校が新設され、日本の工業化のために活躍した多くの中堅技術者を養成した。これらの高等工業の校長に任命された技術者のなかには、横紙破りと思えるほどの大人物が何人かいたのである。ほとんど連日学生と酔いつぶれるまで酒を飲ん

でいながら、たくさんの著述を残し、多数の高分子化学工業の担い手を育て上げた桐生高工校長・西田博太郎などもその一人であったが、「無試験・無採点・無賞罰」の三無主義を実行した横浜高工校長・鈴木達治もまた一世の名物校長であった。文部省の監督下にありながら、これらの校長が思うままに自らの教育方針を実行して、特色ある校風を作りえたのは、彼らの政治的手腕がなみなみならぬものであったからであるが、同時に、西田博太郎や鈴木達治らは技術者としての実績があり、産業界の支持が厚いので、官僚もうかつに口出しできなかったのである。

鈴木は話したり書いたりするのが好きだったよう、校長を敬愛する卒業生によって三冊もの回顧録、言行録がまとめられている。その中で自ら語っている経歴は次のようなものである。

#### ハリス理科学校に学ぶ

鈴木達治は愛媛県の生まれで、小学校卒業後しばらくしてから京都の同志社英学校を経て更に付設されていたハリス理科学校に入った。

明治二十年前後にハリス理科学校があったことは、今ではほとんど忘れられているが、初期の理科教育においては異色な私立学校であった。同志社は有名な新島襄校長が主宰するキリスト教主義の学校で、アメリカの教会との関係が深かった。同志社の最初の卒業生である下村孝太郎が化学を学ぶためにアメリカに留学し、帰国するとき、ハリスという篤志家から託された十萬ドルの教育基金をもとに、理科学校がつくられたのである。下村はその教頭格であった。この学校は

状況の変化により、わずか数年で閉鎖されたが、ここから、京大教授・中瀬古六郎、フェライトの発明者・加藤與五郎などの独創的な科学者が巣立っていった。下村孝太郎は大阪ガスの技師長に招かれてわが国最初のコールタール系有機化学工業の開発に着手し、実験中の事故のために晩年は盲目となりながら、日本染料会社で、染料の国産化を指導したのである。

同志社での七年間の生活が、鈴木達治の生涯の人生観、教育理念を決めた。同志社では生徒取り締まり規則としては「飲酒登楼その他淫楽がましき所へ出入を禁ず」という一項目があるだけで、生徒の自発的な規律にまかせられていた。それでいて在学中は一人もタバコさえ吸う者がいなかったのである（もともと卒業後の鈴木は酒もよく飲んだし、タバコも煙洲と号するほどのヘビースモーカーになった）。また、キリスト教を強制することもなかったため、鈴木は信者にならなかった。明治二十三年に教育勅語が發布され、文部省は全国の学校に奉読することを命じたが、同志社はこれを無視したので、在学中の鈴木は勅語が發布されたことすら知らなかったのである。

押しつけによらず、生徒の自発性を重んずることは、授業のやり方にもあらわれていた。生徒はあらかじめ教科書を読んできて、教室では先生と自由な質疑応答が行われたのである。この経験から、後年、鈴木は母乳教育と名づける教育法を推奨した。母乳教育とは、コップに入れたミルクを与えられるのではなく、直接乳首に吸いついて飲むべきだというのである。同時に「独自

の校風をつくることが、学校経営の第一義」という信念を抱き、自分が校長になったとき、これを実践したのである。

### 心ならずも教職に

明治二十七年、理科学校を卒業した鈴木は、熊本の第五高等学校化学教室の助手になった。当時五高で化学を教えていたのは大幸勇吉教授で、英語の教授には夏目漱石がいた。鈴木は助手のかたわら、高等学校卒業の資格試験に合格し、東京の理科大学（今の東大理学部）化学科に進んだ。先生は、桜井錠二、池田菊苗両教授である。化学科の同級は後の東大教授・片山正夫、浜松高工校長・関口壮吉と鈴木の三人だけであった。

明治三十二年、化学科を卒業した鈴木は二十八歳になっていた。実業界に入ること希望していたが、化学工業の会社はほとんどなかった時代のことで、就職の道は教員しかなかった。当時は、大学卒業生はすぐに地方の高等学校か高工の教授になれたのであったが、その口もなかった。島根県の浜田中学と、仙台の二高の講師の話がたっただけなので、心ならずも後者を選び、半年後、教授にはなったが、給料の点では不遇であった。その後、広島高等師範に変わったが、この教育は学生の自由を全くみとめず一切を規則で縛る空気であったので、鈴木はこれに反発した。「運動会を開きたい」という学生に同調し、これを見とめない校長の訓話中に学生が床をふみ鳴らすという事件の黒幕になったのである。この件で学校当局から睨まれていたが、幸いに

して恩師桜井錠二から、蔵前の東京高工に転勤すれば、外国留学できるといふありがたい誘いがきた。鈴木回顧によれば、「実業に志してその意を得ず、教育の本舞台にあってその教育に飽き足らず思っていたので、実業に直結する工業教育ならば、と喜んで転任を承諾した」。明治四十年のことである。

蔵前に転じてからの鈴木は、その期待どおり、魚が水を得たような活躍をはじめた。まず二年十カ月という長期間、ドイツ・ハノーバーの高等工業学校に留学し、当時最も進歩していたドイツの工業化学の知識を身につけたのである。

二高奉職後の八年間、鈴木は一度も昇格昇給を受けなかった。同期の者にくらべて鈴木自身は、はるかに遅れていたが、蔵前の坂田校長は一ぺんに遅れをとりもどしてくれた。そればかりではない。産業界とのつながりがいろいろできて、学校公認の下にいろいろな企業化の実地を指導することができたのである。よい意味の産学協同の時代であった。

たとえば東北、北海道に甜菜糖工業を推進すべきであるという意見を雑誌『太陽』に連載したところ、さっそく反響があつて台湾製糖の松方社長から帝国ホテルに招かれ、その結果、同社は帯広に甜菜糖工場を建てることになった。朝鮮の東洋拓殖会社に平壤（ピョンヤン）の無煙炭と満洲の撫順炭を混合してガスを発生し発電するという計画を授け、自身朝鮮総督府の会議に乗りこんで皆を説得し、朝鮮電気工業会社の設立に至らせた。またモンゴルの砂漠まで出かけて天然

ソーダを探険している。日本カーボン、三菱鉛筆などの会社の設立にも関係しており、実業界に飛躍したいという野心をこういう形で満たしていたのである。

しかし、なんとといっても蔵前時代の鈴木が、産業界に関係して最も華々しく活躍したのは、ハーバー法空中窒素固定の特許権導入をめぐる一幕であった。またこのときから、鈴木と横浜との深いつながりができたのである。

#### ハーバー法導入で高峰博士と張り合う

ドイツ留学から帰ったときから、鈴木は日本で空中窒素固定を工業化すべきであるという信念を持ち、これを外部にも提唱していた。

作物の肥料として窒素化合物が必要だということは、当時の日本でもよく知られていたが、実際に使用されていたのはチリ硝石やコークス炉の副生硫安だけであった。しかし、空気の成分の五分の四は窒素である。これをアンモニアや硝酸のような化合物に変えれば無尽蔵に窒素肥料が作れると考えられた。ヨーロッパでは、電力エネルギーを利用して、空中窒素を固定するためのいくつかの方法が開発されつつあった。すなわち一九〇五年（明治三十八年）には、フランクとカロリーの発明した石灰窒素法がイタリアのピアノドルタで工業化され、同年ビルケランド・アイデの電弧法硝酸工場がノルウェーで稼動している。しかしながら、工業化学の研究がまだ始まっていなかった日本では、空中窒素固定技術の内容を理解できる人は少なく、鈴木はこの数少ない

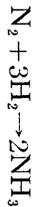
先覚者の一人であった。

ある日鈴木は、突然、横浜の社交クラブに招かれて、空中窒素固定の講演をした。その席には原富太郎、中村房次郎、茂木惣兵衛といった横浜財界のお歴々が集まっていた。大震災前の横浜には生糸の取引で財をなした個人商社が多く、新興産業に共同投資する計画を練っていたのである。鈴木の話にひかれて、この人々は大正二年（一九一三年）に電気工業組合を組織し、ヨーロッパから適当な技術を導入して空中窒素固定を工業化しようと乗り気になった。鈴木はそのプロモーターであった。

滞欧中の農商務省技師・今津明（後にイマヅ蠅取粉を事業化した人）から、フランスのセルペックが開発した窒化アルミニウム法が有望であると知らせてきた。この方法を化学式で示すと、



というもので、ボーキサイトを原料とし、アンモニアを得ると同時に、アルミニウムの精練ができる、面白い方法であると考えられた。そこで鈴木は、横浜側を代表してパリに赴き、セルペック法の技術導入契約にサインしたのであるが、その間ドイツに寄ってみると、ベルリンにあるカイザーウィルヘルム研究所のフリッツ・ハーバー博士の発明した空中窒素と水素の高圧反応によるアンモニア合成プロセス、



の評判でもちきりである。たまたま旧友の田丸卓郎がハーバー博士の助手をしていたので、その案内でベルリンでハーバー博士の公開実験を見ることができた。水素と窒素のボンベから合成管を通ったガスが、場内にアンモニア特有の臭気をただよわせたのを嗅いで、鈴木は「セルペック法よりもハーバー法が本命だ」という確信を得た。実際、ハーバー法はバディッシュ・アニリンソード(BASF)社において、工業用触媒および装置の開発が完成して二年前からルードウィヒスハーフェン工場でパイロットプラントが動いており、この年一九一三年はオッパウに日産三十トンの本格工場が稼動しはじめた。空中窒素固定工業にとって記念すべき年だったのである。そしてハーバー法の日本特許は、明治四十三年特許一七八三四号としてすでに成立していた。この特許権を横浜のために獲得したいと考えた。

そこへ、横浜から長文の電報がきて、東京では、渋沢子爵を中心に三井、三菱、住友、浅野ら有力財閥が連合して空中窒素固定の工業化を企てており、その代表として高峰讓吉、近藤会次郎両氏がヨーロッパにやってくることを知らせた。鈴木は「これはハーバー法を狙っている」と直観した。『近藤会次郎伝』などによると事実は東京側もまだセルペック法を本命視していたのであるが、ともかく鈴木は横浜側の代表として、高峰博士らより前にハーバー法を獲得してしまおうと考えた。高峰博士はタカジアスターゼやアドレナリンの発明で有名な化学界の長老であっ

て、ニューヨークに特許事務所をかまえる国際的実業家でもある。一介の高工教師・鈴木達治よりも格が一枚も二枚も上である。バックの横浜連合も三井、三菱らにくらべればスケールが小さい。にもかかわらず、いやむしろ相手が大物であればあるほど、闘志を燃やしたところがいかにも鈴木らしい。

鈴木は、高峰一行も必ず田丸を仲介に頼むであろうと見当をつけ、田丸をつかまえて離さない作戦をたて、ついに特許権者であるBASFの本社に乗りこんで、「すぐにライセンスはできないが、日本の他社にも特許は渡さない」という紳士協約をもらってしまった。

あとから来た高峰一行も、ハーバー法の優れていることを認めたが、横浜側が先行しているのを見て驚き、かつ、困った。高峰譲吉はさすがに大物で、パリのホテル・マゼスチックにアメリカ人の夫人とともにどっか腰をすえて、鈴木に「話し合いをしよう」と手紙を出す。鈴木にしてみれば「パリに出てゆけば東京、横浜の合同事業の話になる。そうなれば空中窒素固定事業の中心は高峰博士となり、自分は去らねばならない」と思いつめて、ベルリンから出て行かない。しばらく腕み合いが続いたあげく、とうとう鈴木が折れて、パリで合同事業の契約ができたのである。帰国した鈴木の話の聞いて横浜側もこれを了承した。

ところが翌大正三年、第一次世界大戦が勃発し、ドイツは敵国となったので、窒素固定技術導入は一切ご破算になった。鈴木達治も高峰博士も無駄骨を折ったことになるが、鈴木にとっては

一世一代の大芝居を演じた思い出であったのだろう、この話を何度も書き残している。しかし日本政府が大戦中敵産として没収したハーバー法特許の使用権を三井、三菱、住友などとともに横浜グループにもみとめたのは、このとき鈴木木の活躍があったからである。横浜グループは、大正四年に鈴木を中心とする横浜舎密研究所を設立し、独自でアンモニア工業化技術の開発をしばらく進めていたが、資金難のため昭和四年に特許使用権は満鉄に譲渡される。このような動きを通じて、鈴木と横浜実業との結びつきは固くなっていったのである。

#### 横浜高工の開校

大正六年十月、鈴木達治は文部省に呼ばれて、新設される横浜高等工業学校の校長任命の内意を伝えられた。松浦鎮次郎専門学務局長の「万事君に一任するからよろしく頼む」の一言を聞いて鈴木は心の中で「しめた、鬼の首を取った」と思って、校長就任を承諾した。

というのは、かねがね縁の深い横浜ならやりやすいし、自分の理想とする学校、教育を実施するためには校長になる必要があり、監督官庁である文部省の一任をとりつけたので、干渉を排除することが可能と考えたからである。

そのときすでに鈴木木の中にできあがっていた理想の教育方針とは、

- (1) 官立学校でありながら私立と同様な運営をして、特色あるスクールカラーを作ること。
- (2) 具体的には、無試験、無採点、無賞罰の三無主義の断行。

(3) 教員は研究教育に専念させ、会議などは簡略に、校長が対外、対内的な問題に一切責任をとる。

(4) 高等工業学校で完成した技術者を育てる。前任校蔵前の東京高工では、当時、学生、教師、卒業生が一丸となって工業大学昇格運動を展開していたが、鈴木はこれを苦々しく思っていた。学校生活を延長し、上級学校に入学さえすれば、それで人間ができ、偉人ができあがるという考え方は、間違っていると信じていたからである。

(5) 付設して、夜間の商工実習学校（県立）を作り、工業教育のすそ野を広げる。  
という五つの理想を、鈴木は横浜高工においてすべて実現した。

まず三無主義に対して役人に文句を言わせぬことである。横浜高工は大正九年四月、機械、応用化学、電気化学の三科計百二十名の入学者を迎えて開校、十月二十九日に記念式を挙行した。鈴木は中橋徳五郎文部大臣の私邸に坐りこんで、大臣は地方学校の行事には出ないという慣例を破って、記念式に臨席させることに成功した。そして当日、大臣のいる前で、「わが校は無試験、無採点、無賞罰である」と宣言したのである。このとき、大臣が何も言わなかったから、横浜高工の三無主義は文部省に黙認された形になった。作戦成功である。

卒業生の話を聞くと、横浜高工の三無主義はほんとうに徹底していた。たとえば、校庭で野球をして窓ガラスを割ると、小使さんが黙って新しいガラスをはめて、それで終わりであった。入

学試験は内申書と面接だけ。無試験・無採点では、学生に励みがないようであるが、校長は「就職は俺が全部面倒みるから、君たちは自由に好きな勉強をしている」という態度であった。母乳教育の真髄である。

関東大震災後の世の中の混乱の中で、卒業間際の実習学校生徒の賭博事件が警察にあげられ、新聞に出てしまった。県当局は問題の生徒を退学にせよと言ってきた。鈴木校長は「罪なき者の女を打て」という聖書の文句をひいた一文を横浜貿易新聞に投稿し、卒業式の日黙って彼らに免状を渡し、そればかりか当人たちを校長室でお茶菓子をごちそうして送り出してしまった。昭和の初めには全国の学校に社会主義思想が蔓延し、これに対する文部省、警察の取り締まりが厳しかったが、横浜高工では三名の学生が留置されたとき、校長は警察、検事局に再三かけ合せて三名をもらい下げ、その足で学校につれて来て、ふつうに授業を受けさせた。実験室で待ち受けていた同級生は皆「よかったな」と喜んだという。

筆者の知るかぎりでも横浜高工の卒業生は、のびのびしたムードの中にプライドを持ち、しかも技術者として立派な業績をあげている方々ばかりである。このような技術者を多数育てたことだけでも、鈴木氏の三無主義教育は成功したといえることができるであろう。

#### 卓抜した手腕と鮮やかな引退

鈴木達治は優れた教育思想家、学内の統率者であったばかりでなく、対外的な面で鮮やかな政

治的手腕を發揮した。その例を二、三あげると、まず横浜工業懇話会の開催である。

鈴木は「国立学校であっても、所在地の県や市から遊離してはいけない」と考えて、大正十一年から横浜市の商工業者によびかけて上記の会を毎月開き、百名以上の会員を集めて会食、講演を聴くことを二百二十七回つづけた。これによって、空中窒素固定問題以来の横浜実業界との結びつきが維持され、實際上この会は、横浜高工の後援会になった。

次は、造船学科の増設問題である。昭和の初め、大阪高工は東京高工とともに大学に昇格することが決まり、これに伴って文部省は大阪にあった造船学科を神戸高工に移管する方針を決めた。当時は造船界の不況がひどかったときで、神戸は卒業生の就職を心配して造船学科を引き受けようとしなない。ところが鈴木は、この学科を横浜高工に引き取ってしまった。これには学内でも誰も賛成者がいなかったが、鈴木のハラは別のところにあった。すなわち看板は造船学科ながら、内容は航空学科にしようとしたのである。財政難の時代で航空学科の新設がストレートにみとめられることはありえないが、将来必ず航空が発展し、航空技術者が必要になるに決まっているから、造船に名をかりて実質的に航空学科の教育をしまおうというのである。そして数年後には造船学科航空分科という名称を勝手に作ってしまった。文部省はこれを横浜の私生児と呼んでいたという。やがて鈴木の子想どおり、航空技術者が要望される時代が来て、昭和十四年、航空分科は正式に航空学科と改称されたのであるから、この問題は鈴木の頭腦的プレーの勝

利であつた。

昭和十年一月十八日に、鈴木達治は横浜高工校長就任満十五年を迎えた。その翌日、誰にも知らせず文部省におもむいて辞表を提出したのである。辞表の文面は、

『私儀本年ヲ以テ頽齡六十五歳ノ春ヲ迎へ、且当一月十九日ヲ以テ本校創立満十五ケ年ニ相達シ申候ニ付キ、此機会ヲ以テ退職仕度此段御願申上候也』

という率直なものであつた。辞任の背景には何も問題はなく、全く鈴木個人の意思による現役引退であつた。しかも辞表を提出したことは、二十日間、職員、学生に内密にして、その間に後任校長にもと横浜舎密研究所長・富山保を決め、さらに数名の年輩の教職員にも引退を求めて、校内人事の若返りを達成した。二月十三日、講堂で全学生に引退を発表したときには、もう誰も引きとめることはできない状況をつくっていたのである。

三月十三日、横浜市民三百名がホテルニューグランドで鈴木校長に感謝する会を開いた。挨拶に立った鈴木は、一生を回顧して「元来私は実業界に出て巨万の富を得たいと志したのですが、就職難で一時の方便として勤めた学校に一生腰を据えてしまいました。三十数年の私の一生の教育界生活が一生の事業となりました。その事業がここに終わったので、今さら世に求めるものは何もありません」とさわやかに語つた。この言葉どおり鈴木は横浜郊外六ツ川に隠棲して、余生を送つたのである。

戦後の教育改革のために横浜高工は高商、師範と合併して横浜国立大学となったために、三無主義の特色は失われ、共通一次試験と単位制のもとにある普通の大学になってしまった。教育に對する管理統制は戦前よりも現代のほうが強化されたというべきであろう。鈴木達治が、実業家にはなれなかったが、その代わり学校経営者として思う存分自己の理想を実現できたのは、一に時代に恵まれていたともいうことができる。

(うちだほしみ…東京経済大学教授)

(参考文献) 鈴木達治『六川夜話』『煙洲漫筆』『煙洲殘筆』、間島三次『近藤会次郎伝』

## 名教自然と蒙古天然曹達の探険

——日本のソーダ工業百年こぼれ話(その一)——

応化昭十三年 杉野利之

わが国のソーダ工業は、第一次世界大戦勃発を機に、電解法及びアンモニア・ソーダ法を創始して、近代化の道を辿り始めるが、この頃、マガチ灰と英国資本の恐るべきことを知り、警世憂国の言動を共にした二人の人物がいた。横浜の実業家三溪原富太郎と蔵前高工教授煙洲鈴木達治

である。本稿は鈴木達治について、その教育信念の一端とソーダとの関わりを述べてみたいと思う。

### 自由主義

横浜高等工業学校は現横浜国立大学工学部である。その横浜高工は横浜市中区（現・南区）大岡町にあった。その門（といっても扉もなく、守衛もいなかった）を入ると、「名教自然」という大きな石碑が立っていた。この文句は、横井小楠の詩句「靈智神覚湧如泉、不用作為付自然」から生まれたとする初代校長鈴木達治の作語であり、後に多くの人が、自由主義の教育を表わすものと換言し、また、立派な教えは自然であるとも解釈するようになった。

とまれ、その鈴木達治は、大正中期の画一主義、形式主義の時代に、生徒（学生、今日の大学生ではない）を飽くまで一個の人格と見て、その自己完成を助けるのが教育であるという信念から、いわゆる「三無主義」を実践した。すなわち、無試験、無採点、無賞罰である。「三無主義」とは、一見放任主義のように見え、その弊害を案ずる人もあつたが、決してそうではなく、教育者は子供を育てる親の気持で、生徒と一体となって瞬時も目を離さない周到な注意が必要である。教育者はたえず生徒に目を配っていて、学校におろうが他にに向いていようが絶えず生徒と共にある心構えでなくてはならぬ———というのである。

しかし、この「三無主義」は、大正九年（一九二〇）同校創立のときから、時の文部大臣中

橋徳五郎の黙認を得て、以来約十五年間公然かつ忠実に実践されてきた。「三無主義」は、その本領として授業中禁煙・長髪禁止・学生劇禁止といった一切の禁止令は出さず、講堂に御真影も勅語も奉戴せず、三大節の祝賀式も行わなかったが、文部省の圧迫も社会の指弾も受けることがなかったのは、鈴木教育者としての人徳と「名教自然」という教育の真髓がしからしめたのであろう。

さて、上述のように三無主義の理念は、鈴木教育者としての集積に基づくもので、例えば、その一つである無賞罰にしても、その来るところ「一旦収容した学生、生徒は学校が総ての責任を持つだけの覚悟をしなければならぬ」といい、『汝等のうち、罪なき者先ず石を以て打て』としている。一例を挙げればつぎのようなことがあった。鈴木は、第二次大戦中、憂国の情に駆られて、戦意の向上と生産の増強を目的とした必勝懇談会なるものをつくり、自ら会長となってこれを総括した。ところが戦局非にして終戦となった日に、必勝懇談会の会員が、隊をなして、首相官邸を襲ったが目的を果さず、鈴木首相の私邸と平沼枢密院議長の私宅を焼き払うという事件がおきた。鈴木は、直接にも間接にも、焼き打ちには全然関係はなかったが、道義上の責任は総て自分にあるとして、進んで当局の事情聴取に応じ、一部の逃亡者を説得して自首させ、捜索に協力した。結局逮捕された連中は、その後千葉と東京の刑務所に収容され、五年の刑を申し渡

され服役したが、二年半で特赦となり出所した。その中に高工の在學生がいたので、鈴木は卒業証書を貰ってやろうと色々骨を折ったが、容易に果されず、結局出所後二年有余で再入学の手続きを経て卒業証書を彼等の手に渡すことができたのであった。その間、鈴木は鈴木貫太郎大将に書面・面接で再々謝罪し、二十二年九月十四日出所した連中を伴って大将の関戸（千葉県）の自宅に謝罪に行く手筈を整えたが、折悪しくキャスリーン台風の襲来で不可能になったことを、後大将は甚だ残念がったという。因みに必勝懇談会に関連するこのような事件もあったのに、鈴木は占領政策による追放を免れている。

次に鈴木 of 思想的柔軟性を示すエピソードを紹介しよう。大正九年横浜高等工業学校の校長となった鈴木は、建築科の創設に当って、初代教授として、東京の曾根・中条建築事務所にいた優秀な建築家中村順平（故人）に白羽の矢を立て、三顧の礼を以て迎えた。中村は授業開始に当り、建築製図などの能力によって生徒を三分し、優秀な者をアンシアン（仏、ancien、古参、長老の意）、劣等なグループをサルコッション（sale cochon、汚ない豚）、その中間にある連中をミキスト（mixte、中間）と名付け、製図指導上の一方針とした。すなわち、アンシアンはサルコッションの製図を指導する地位に立ち、従ってサルコッションは、アンシアンの命令に服して、昼食のそば、菓子を始め煙草の用まで達することとし、ミキストは中立で自分のことに専念し得

る仕組である。これを製図室に発表し、実行を強制したのであるから、サルコッソン連中怒るまいことか、カンカンになって鈴木 of 自宅に押しかけ、「校長はこれを許可したのか、速やかに撤去せよ」と難詰した。

鈴木は、既に中村の一風変わった教育方針を感じとっており、「ああ、やり居るな」とむしろ腹中会心の笑みをもらしていた。そこで生徒の詰問に対し、のらりくらりと、いわゆる暖簾に腕押し of 答弁を続け、さりとて生徒を圧迫するでなし、勿論結論の出る筈がない。面会は何回ともなく繰返されたが、堂々巡りでけりはつかない。結局サルコッソン連中は一体となって許可なしに製図机を講堂の片隅に運び移し、今後他の教授を聘してくれと請願して来た。鈴木は、阿部美樹志（工博、後の企画院総裁）に指導を依頼した。

その後も、サルコッソンとアンシアンの間は呉越人のままで、時に不穩の沙汰も鈴木 of 耳に入ったが、別に干渉もせず、三年間が過ぎた。鈴木は、このままではまずいと思い、何とか纏めて仲良く卒業させたいものと考え、サルコッソンの中に偶々いた野球応援団の幹部を呼び、野球で一糸乱れぬ統制を示したように、この際一切を水に流して融和し手を握り合って卒業して行く方策を講ずることを君に期待するが、どうだろうと説いた。黙って聞いていた彼は、快諾し、その結果建築学科の謝恩会は一体となって和氣霽々の中に催され、全員欣然として卒業して行った。中村 of 制度は学生 of 反対で、そのままの形では最後までは継続できなかったが、この私塾的

な雰囲気は、中村在任中存続し、横浜高工建築科の特色ある学風を形作っていた。鈴木は、中村のことを教育者としても立派な尊敬すべき人であるとその随筆集に書き残している。

近時教育の荒廃を見るにつけ、明治人の残した教育の片鱗を見ることができると共に、人間鈴木達治を彷彿させる挿話として紹介した。

さてここまでは鈴木達治の教育論の片鱗である。鈴木は開校に当り、炯眼にも専門学校では唯一の電気化学科をつくり、本校卒業後直接に、あるいは東京工業大学の同科を経て、ソーダ工業に多くの人材を送り出しており、この面の貢献も小さくないと思う。しかしここでは、鈴木が、横浜高工校長に任命される前、蔵前高工（現東京工大の前身）の教授をしていたころの「塩の専売廃止論」と「蒙古天然曹達の探険の報告」を鈴木自身の回想録および工業化学雑誌に投稿された論文によって紹介したいと思う。

#### 塩の専売廃止論

鈴木は東京帝大理科大学卒業後、仙台第二高等学校、広島高師を経て、蔵前高工の教授になる前二年十ヶ月ドイツ（ハノーバー）に留学、その帰国土産として、空中窒素の固定と、朝鮮にバラを栽培して香料を製造すること及び日本全土に於ける岩塩の搜索を提唱している。明治四十三年のことである。この岩塩の探索についてはその後記録がない。あるいは地質の専門家によって否定されたのであろうか。

さて明治三十八年（一九〇五）六月、一月一日公布された塩専売法が実施されたが、鈴木は、「化学工業に色々な不便が生じているが、何故実施したのか」と、専売局長日賀田種太郎を訪ねた。日賀田の答えは、日清戦争後、中国の塩が多量に日本に輸入され、瀬戸内八州塩田が圧迫をうけて窮迫した製塩業者が請願してきた、政府も財政窮迫の折柄、専売による利益を考えて早速これに応じた、との事であった。そこで鈴木は、海軍省に出向き一朝事ある時にも中国塩を輸入するため対馬海峡を安全に保護し得るかどうかを質し、安全の確答を得ている。（注・明治三十八年五月二十七―二十八日は、日露戦争による日本海々戦で、日本は大勝利を得ており、海軍省の意気軒昂たるものがあつたのではなからうか）

そこで、鈴木は塩を原料とする化学工業を列挙してこれらが如何に専売のため不利となるかを説明し、一方において塩専売により政府が獲得する利益は、他に求めて余りあることを力説して、塩の専売廃止論を唱えた。その財源の一つは、マッチの課税である。警視庁でマッチを原因とする火災を調べ上げ、これに課税すべきである。次に地租（注・旧法で土地に対して課した収益税のこと）も所得税同様に累進的に賦課し、一定の広さ以上の土地所有者に対しては、却って損失となるようにする。これによって自作農は保護され、土地を愛するようになり、極端ないわゆる不在地主はなくなるであろう。第三に、酒類の増税である。この三者の実施は、専売の利を遥かに越えると論じて、雑誌「太陽」に掲載したほか、種々執拗に活動したが、専売局はあまり

問題にしなかった。専売局の一部では鈴木という奴は厄介至極で煩しいから、そのままそっとして置くがよいとの意向であつたらしいと、鈴木は回想している。

#### 蒙古天然曹達の探險

大正三年（一九一四）第一次世界大戦がおこると、これ迄輸入に頼っていた化学薬品が不足しだした。この間の事情については、「日本ソーダ工業百年史（三、生産需給）」に詳しい。

この頃、横浜の実業家三溪原富太郎は、東蒙古に天然曹達の露出している処があり、その採取権は蒙古王が持っているから、方法を考えれば獲得できるのではないかという話を朝鮮の人から聞いた。原は、その様子を知らうとして適当な探險家を求めて、鈴木に決定したが、当時満州や東蒙古には馬賊（注・原文のまま）が頻々と出没しているので、出費は厭わぬから安全には最善をつくすよう注意を与えた。

因みに、ここでいう蒙古とは、現在の中華人民共和国の一部である内蒙古を指し、現在のウランバートルを首都とするモンゴルのことではない。鈴木が探險する地区はその内蒙古の東辺に当る。

さて翌四年（一九一五）十月、鈴木は单身東京を発ち、大連に到着するや、蔵前高工出身者の満鉄社員にひそかに目的を話して同行者を募った。持家のない独身者という条件で、応用化学科出身の教え子秦守が唯一人これに応じた。鈴木は、大連で準備を終り、奉天に先発し、秦を待つ

た。秦は形見として残す品や所持品の整理、遺書の作成のため一日遅れた。十一月になるので防寒毛皮など残りの準備を奉天で整えたが、護身用具は一切携行しなかった。二人は奉天を発って出発点である四平街に向い、一泊して朝三時頃、陸軍の世話による通訳を含めて五台の馬車を連れ、西のかた鄭家屯に向った。二人の通訳は、後にハルピンで記念碑になった有名な志士（沖・横川）の一味であり、途中色々の冒険物語を聞くことができた。收穫の終った高粱畑のなかを進むのだが、刈り取られた後で、道路というものは殆どない。馬車は四角な箱を車に乗せたような満州特有のもので、地面の凹凸が激しいため箱の天井に頭を打ちつける危険が多分にあった。彼等は時々苦しさの余り、歩行し得るような場所では車を捨てて歩いた。二頭立ての馬車だが道が悪く遅々として進まない。砂漠のなかを行く駱駝隊もかくやと偲ばれ、凄愴な感じであった。後に、鈴木は蔵前高工での報告講演会で、その感想を次の漢詩に託して朗詠した。

馬を走らせて西来天に到らんと欲す

家を辞して両回月の円なるを見る

知らず今夜何れの処にか宿す

平砂万里人煙を絶つ

現在では、四平街と鄭家屯の間は汽車も通じ便利になったが、その頃の雨期には五日もかかった。彼等も中一泊を要した。

鄭家屯の日本人としては確か二人の売春婦がいて、その気の毒な身上話を聞いたりした。ここで麻の袋を買い、牧草をつめて馬車の箱の三方に吊し、馬車の動揺から頭を守る準備もした。そして予め奉天で張作霖に依頼してあった護衛の騎兵二名と、二十才に満たぬ道案内の青年を含め、一行は総勢十三名となった。そして西の方、興安嶺の方向に進んで玻璃（ポリ）というところに来ると、一ヶ所曹達の精製所があった。これが後述する玻璃城甸子である。

上述の漢詩に見るように、この辺りは全くの平野で、起伏した丘陵のようなものすらない。たまに十〜二十尺の高さ、幅三十〜四十間位の砂丘があるのみの渺茫たる景色である。そして葦のような高さ一〜二尺の雑草が一面に生えている。この平面の一部に天然曹達が露出しているが、その多いところでは雑草が殆どなく、雑草の繁茂しているところでは曹達の露出がなく、露出の分布状況がよく判る。その状況から見ると、濃厚な露出面は極く一部で、あそこに数坪、此処に数十坪というように点々として存在しているに過ぎない。そして露出は高地必ずしも少なくなく、低地必ずしも多くないところを見ると、マガチのように鋳床があつて、これが溶解して低地に溜って蒸発乾固したものではないらしい。

当時は十月下旬〜十一月上旬であつたが、既にマイナス五〜マイナス六度となり、地面は殆ど氷結していたが、日中は日光のため一部解氷する。天然曹達は冬期にしか見られないというのは、蒙古の夏が雨期で、冬期になって雨が去り、地面が乾燥し、気温も下ると露出してくるので

ある。地下土中の試料を採取して調べて、鈴木は“之は唯一個所の实例なるを以て全般を期し難きも”と断りながら、曹達の大部分は冬期は露出しているのではないかと考えている。住民は「箒を以て掃いて採ったあと、数日すると又露出する」と異口同音にいった。そして曹達に必ず  $\text{NaCl}$ ,  $\text{Na}_2\text{SO}_4$  が多量に共存していることから、“恰もルブラン法が天然に行はれつつありと見ることを得るが如し”と述べている。

結局その後の調査によって、多少なりと採取の可能性を残すのは次の二ヶ所であるとして、その詳細を報告しているが、ここではその要点を摘録しよう。

#### ① 玻璃（ポリ） 城甸子

ポリは鄭家屯の北西十数里の地にあり、長さ十里、幅二里位の細長い土地らしい。ここで城は曹達、甸子は平沙中特に低湿地の謂である。一軒の家があつて、附近に霜のように露出した曹達を柳の枝でつくった箒で集めて精製していた。この辺りには殆ど樹木らしいものはなく、小さな草ばかりで、たまたまあるのは柳である。この地方の支配者である蒙古王は箒一本について幾らという税を課しているということである。面白いことにこの精製所では、曹達を溶した液を汲む柄杓まで柳の枝で作っていた。初めは洩れるが、使用している内に曹達の結晶などが附着して柄杓の用をなす。大きいものはタンクもやはり柳で作つてあつた。

露出した結晶は、多くの土壌を含んでおりその成分例はつぎのようであつた。

Na<sub>2</sub>CO<sub>3</sub> 12.04%

NaCl 1.45%

Na<sub>2</sub>SO<sub>4</sub> 0.75%

この原料を水で処理して土壌を沈澱させた上澄を、先の雑草を燃料として蒸発乾固する。径四尺位の鉄鍋を傾斜した煙道に六ヶ一組として並べ濃縮した液は漸次上部に移す。製品は、二種あって、一つは煮沸中の濃厚液上に析出したNa<sub>2</sub>CO<sub>3</sub>・H<sub>2</sub>Oの成分のもの、もう一つは濃縮液を径二尺五寸の鉄鍋に移して冷却したもので鍋型をしており、面城（メンチェン）といい上質のもののは白色の、純度の低いものは汚黄色の結晶曹達である。その成分もまちまちであった。

このような製造所を「城鍋」といって、ポリ城甸子に七ヶ所あり、従業するものは百五―百六人であった。鈴木らが見たものは従業するもの十五―十六人で、製造高は年間十万斤（六十トン）に達しない程度である。

なお附近の溜り水（淡黄色、無臭）を分析したところ、次のようであった（勿論一例に過ぎない）。

Na<sub>2</sub>CO<sub>3</sub> 0.18%

NaCl 0.16%

いが）。またポリ城甸子全面の推定は仲々困難だが、仮に全面積の五パーセントに一センチメートルの厚さがあるとすれば、全量は二十万トンとなるが、採取後の再析出の可能性など全然不詳

で、蒙古天然曹達はその露出状況や生因について研究が必要であるとしている。因みに太布蘇城泡への移動途中、華江鎮という処に小さな湖があって、多量の曹達の露出がみられたので、その湖畔の土壤を調べた結果は次のようであった。

地上～三寸 (深)	$\text{Na}_2\text{CO}_3$	1.26%
三寸～六寸 (深)		1.24%
六寸～九寸 (深)		0.94%

② 太布蘇 (タクソノール) 城泡

タクソノールは、はっきりしなかったが、洮南府の南東四十里内外に位置しているらしく、目測では長さ四里、幅二里位であろうか。城は前述のように曹達、泡は池の意である。周りは二十～三十尺の堤防で囲まれ、十一月上旬の当時は約三分の一は洋々たる水を湛えていたが、他の三分の二には茅か葦のようなものが水面に出ていた。

この湖水の水は、ポリで採ったものよりやや色がついており、細かい土壤のため多少濁っている。そこで約一週間おいて、上澄液を得て分析した結果はつぎのようであった。

比 重	1.034
氷 点	-2.04℃
全固型物	4.24%

(カルシウム、苦土を含まず)

NaCl	2.27%
Na <sub>2</sub> CO <sub>3</sub>	1.31%
Na <sub>2</sub> SO <sub>4</sub>	0.68%
計	4.26%

すなわち曹達池といつても主成分は食塩である。そこで、普通の温度で蒸発させると、先ず食塩の結晶を生じ、これを除いてゆくと曹達の結晶が出るが、重炭酸曹達も含んでいる。その成分を調べたところ、



に近く、いわゆるトロナ塩の



という成分とは異なっていた。

タクソノール城泡の堤の上に、一個所城鍋があったが、ポリのものより規模はかなり大きかった。この辺りでは冬になって城泡の沿岸が退水した干潟地に露出した天然曹達を採取し堆積しておき、雨露を防ぐため一尺厚さの土砂で覆ってあった。これを順次掘って、先の城鍋で、ポリと同じ方法で精製していた。

またこの城泡では、冬になると結氷し、池の上を馬車が移動できるようになるが、その頃になると、氷上にも曹達の露出が見られ、これを氷城といっている。この氷城は稍純粋なものと同じが、理屈に合わない。その外噴水所なるものあり、冬期に高く氷柱を生ずる等の現象もきいたが、実際には見られなかった。

この城鍋で使っている原料は、数年前に採掘した堆積貯蔵物であったが、その成分は次のようであり、

$\text{Na}_2\text{CO}_3$	21.89%
$\text{NaCl}$	痕跡
$\text{Na}_2\text{SO}_4$	17.57%

また、この原料で製造した面城の成分は、次のようで、不思議に  $\text{NaCl}$  を含んでいない。

$\text{Na}_2\text{CO}_3$	33.36%
$\text{NaCl}$	痕跡
$\text{Na}_2\text{SO}_4$	7.97%

原料曹達液の純度や城鍋の作業法から見て、面城の品位に差違が大きいこと当然だろうが、更に採取した天然曹達を精製せず土壌と共に大きな煉瓦形に固めた土城というものがあり、長春で購入したもの（産地不詳）は次のような組成であった。

Na<sub>2</sub>CO<sub>3</sub> 28.64%

NaCl 38.79%

Na<sub>2</sub>SO<sub>4</sub> 1.62%

調査を終えた一行は、附近で最も繁華な部落である農安が馬賊の危険があると聞かされ、タクソノールから一路長春を目指した。数日後の午前十時頃遙か水平線の彼方に塔のようなものを見、よく見ると水塔である。であるとすると長春だと一行の意気大いに上り、全く蘇生の思いで前進、午後三時頃長春の駅に着いた。駅の広場に馬車を入れ、護衛兵と苦力の労をねぎらって帰した。鄭家屯で雇った案内者の青年は一〜二日の約束であったが、彼等の常食は高粱や黍で、一行と共にする米食がいたく気に入り、一日二十銭の雇賃で二十日間奉仕してくれた。長春と鄭家屯間の旅費は一円あれば十分過ぎるということであった。

さてステーションホテルに交渉したが、部屋がないと断わられた。長い間、入浴も散髪もせず物騒な風体であったから怪しまれたのだ。事情を詳しく話し、漸く泊ることができた。

鈴木は、蒙古天然曹達は、企業にならぬと断定し、この件では以後原富太郎とは無関係になった。しかし、公式の外部発表である工業化学雑誌（十九編、六百三十一—六百四十一頁、大正五年〓一九一六）誌上では、慎重に「化学工業として東蒙古に於ける天然曹達の経営は別問題な

り」と結んで、更に次のように続けている。「唯其天然に露出し居る状態よりするときは以上二ヶ所、即ち玻璃城旬子と太布蘇城泡の天然曹達は充分に之を採取し得るの量を有するが如し、更に他の蒙古方面を探険するときは同様採取するに足る露出量をなすものあるべしと推考せざるを得ざるなり、我国に於ては未だ曹達工業なしと言ふも可なり、今後其の萌芽を見んとするに当り、マガディ天然曹達と蒙古天然曹達との両者を忘却せず、其の眞想を明かにせんことを希望するものなり」

若い化学者として教鞭を執るに留まらず、憂国の情に燃えて資源を海外に求めるために挺身した鈴木がこの報告と提言を行なっているのは、時恰も、程谷曹達工場（現在の保土谷化学工業株式会社の前身）が隔膜法で、大阪曹達株式会社が水銀法で、それぞれ電解曹達事業を開始した大正五年（一九一六）のことである。

その後報告を見てか、京浜の実業家が二、三面会を求めて訪ね、中には鉄道敷設の計画などを相談する人があったが、鈴木は、企業には採算がとれないことを種々の事実を挙げて論じた。その後満鉄でかなり大規模の探険隊を組織して調査したといわれ、その報告書が残っている筈である。

鈴木は、この前にも高峯讓吉・今津明らの協力を得て、有名なドイツのハーバーの空中窒素固

定に関する特許の導入に成功（大正二年）又この後では石川等の日本カーボン株式会社の設立に力を貸すなど、化学工業の発展に尽力したが、大正九年横浜高等工業学校の設立に当り、初代校長に就任、前述の三無主義を實踐、在任十五年にして昭和十年勇退して以後、後輩を指導する悠々自適の生活に入り、昭和三十六年八月二十九日永眠した。享年九十一才であった。

（追記）

本文は次の文献を対比総合して紹介するかたちで作成したもので、文献のなかの記述をそのまま現代文に改めた個所が大部分であること、敬称を省略したことをお断りする。なお塩の専売廃止論について雑誌「太陽」（明三十八〜四十）を通覧したが、見落しのためか、署名入り文では発見できなかった。他日を期したいと思う。

（一九八三・五・一八）

#### 文 献

鈴木達治…名教自然碑の由来と教育私見の断片（昭三十二）

同…煙洲残筆（昭三十四）

村松四郎（編）…先生の思い出（昭三十七）

鈴木達治…東蒙古産天然曹達 工化、一九、六百三十一〜六百四十一、一九二六（大五）

雑誌「太陽」博文館十一・一〜十三・十二（明三十八〜四十）マイクログフィルム（三十五ミリメートル）「雑誌総目次・

総索引一覽」該当年、何れも国会図書館蔵

ソーダと塩素（一九八三年七号）より